

都城市文化財調査報告書 第90集

TAKABAE - SITE

高 八 重 遺 跡

—牛肥育舎建設地造成に先立つ遺跡発掘調査報告書—

平成 21 年 (2009) 3 月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は牛肥育舎建設用地の造成工事に先立ち、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した高八重遺跡の調査報告書です。

この高八重遺跡では、平成19年度に発掘調査を行い、その結果、丘陵の南東急斜面に縄文時代早期の生活痕が確認されました。出土遺物においても、縄文土器や石器などが多数見つかり、その珍しい立地環境とともに重要な歴史情報を提供してくれました。

本書の刊行が都城市の文化財に対する理解と認識を高めるとともに、今後の学術研究や郷土学習の発展にわずかでも寄与できれば幸いに存じます。

本遺跡の発掘調査に従事していただいた市民の皆様や周辺住民の皆様をはじめ、関係各機関等の方々には多大なご理解・ご協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

平成21年（2009）年3月

宮崎県都城市教育委員会

教育長 玉 利 讓

例 言

- 1 本書は個人による牛肥育舎建設地造成工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は都城市教育委員会が主体となり、同市高城生涯学習課（現文化財課）主査米澤英昭が担当した。
- 3 現場における調査は平成19年4月9日から平成19年6月29日にかけて実施した。
- 4 遺構実測図・土層断面図の作成は米澤が中心になって行い、大盛祐子氏の助力を得た。また調査にあたっては、矢部喜多夫・栗山葉子・近沢恒典・山下大輔・加賀淳一の各氏（都城市文化財課）、桑畑光博氏（市山田生涯学習課；現文化財課）の指導・協力をいただいた。遺構分布図の作成にはコンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム“SITE”を使用した。遺構の製図については米澤・尾曲真貴が行った。
- 5 本書に関する遺物の実測・製図については、石器の実測を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。その他は米澤・尾曲が行った。なお、遺物の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖 1987年版』を参照した。
- 6 本書に関する遺構・遺物の写真撮影は米澤が行った。又、遺構の空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 7 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
- 8 本書の執筆・編集は米澤が行ったが、石器の分類及び「高八重遺跡出土石器について」の執筆は、栗山葉子氏（都城市文化財課）に、第四章の自然化学分析の執筆については株式会社古環境研究所に依頼した。
- 9 本書の執筆にあたり、矢部喜多夫・桑畑光博・栗山葉子・近沢恒典・山下大輔・加賀淳一の各氏（都城市文化財課）、杉山真二氏・早田勉氏（古環境研究所）、大盛祐子氏の指導・協力及び教示を得た。
- 10 本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は都城市教育委員会文化財課が収蔵・保管している。
- 11 本書では、下記の略号を用いている。

SC=土坑

SS=集石遺構

目 次

序文	1
例言	2
目次	3
I 序説	4
1 調査に至る経緯	4
2 調査体制	4
II 遺跡の位置と歴史的環境	5
III 調査の記録	7
1 調査の概要	7
2 遺跡の層序	7
3 調査の成果	12
IV 都城市、高八重遺跡におけるテフラ（火山灰）分析	32
V まとめ	37

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	5	第14図 SS01内出土遺物実測図(2)	21
第2図 調査区域図及び試掘トレンチ配置図	6	第15図 SS02実測図	22
第3図 遺構配置図	8	第16図 SS02内出土遺物実測図	22
第4図 土層断面図	9	第17図 SS03実測図	23
第5図 SC01実測図	13	第18図 SS03内出土遺物実測図	23
第6図 SC01内出土遺物実測図	13	第19図 SS04・05実測図	24
第7図 SC02実測図	14	第20図 SS06実測図	24
第8図 SC02内出土遺物実測図(1)	15	第21図 包含層内出土遺物実測図(1)	25
第9図 SC02内出土遺物実測図(2)	16	第22図 包含層内出土遺物実測図(2)	26
第10図 SC03実測図	17	第23図 包含層内出土遺物実測図(3)	28
第11図 SC03内出土遺物実測図	18	第24図 包含層内出土礫（散石）分布図	29
第12図 SS01実測図	19	第25図 石器実測図	31
第13図 SS01内出土遺物実測図(1)	20		

表 目 次

第1表 SC01内出土遺物観察表	13	第8表 SS03内出土遺物観察表	23
第2表 SC02内出土遺物観察表(1)	15	第9表 包含層内出土遺物観察表(1)	27
第3表 SC02内出土遺物観察表(2)	16	第10表 包含層内出土遺物観察表(2)	28
第4表 SC03内出土遺物観察表	18	第11表 遺跡内出土石器組成一覽表	30
第5表 SS01内出土遺物観察表(1)	20	第12表 石器計測表	31
第6表 SS01内出土遺物観察表(2)	21	第13表 未図化石鑑定計測表	31
第7表 SS02内出土遺物観察表	22		

図 版 目 次

図版 1 基本土層写真	7	図版 4	40
図版 2	38	図版 5	41
図版 3	39		

I 序 説

1 調査の経緯

原状は山林と農地で、山林はほぼ伐採済であった。対象面積は約28ha。開発の概況は、肉用牛の肥育用地として利用するため、30m程度の削平を行い、管理棟・肥育舎・放牧場・調整池を設置するものである。

平成18年度、個人事業者より、有限会社下沖測量を介して都城市へ相談がなされた。同年12月20日、関係者会議が開かれ、下沖測量と市関係各課が協議した。平成19年1月に再度関係者会議がもたれ、開発対象区域内において試掘調査を行うことが必要となった。開発者はその後直ちに文化財所在の有無についての照会を都城市教育委員会へ行った。そこで市教育委員会高城生涯学習課が平成19年1月23日～2月5日の間で試掘調査を行ったところ、中心部やや南よりの丘陵地帯頂部約600～800㎡相当で縄文早期遺跡の存在を確認した。その結果を受けて、平成19年2月2～6日には、市関係各課で埋蔵文化財の取扱いについての協議を行い、平成19年2月9日、試掘結果を開発者へ回答した。そして開発者側と市で協議し、上記確認した範囲において発掘調査を実施することで合意に至った。

2 調査体制

調査は都城市教育委員会が実施し、経費運用は同市教育委員会高城生涯学習課及び文化財課が行った。調査組織は以下のとおりである。

【発掘調査】平成19年度

〔調査責任者〕	都城市教育長	玉	利	讓				
〔調査総括〕	都城市高城生涯学習課長	飯	盛	幸	一			
〔調査事務局〕	同高城生涯学習課主幹	新	地	安	弘			
〔調査員〕	同高城生涯学習課主査	米	澤	英	昭			
〔発掘作業員〕	黒木 トミ子	黒木 征子	窪田 エミ子					
	柚木崎 時男	広畑 雄二	榎木 ハナ					
	坊地 トミ	内村 好子	椎屋 松子					
〔整理作業員〕	尾曲 真貴							

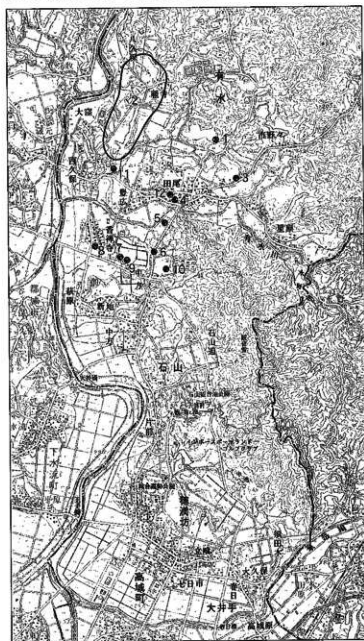
【報告書作成】平成20年度

〔調査責任者〕	都城市教育長	玉	利	讓				
〔調査総括〕	都城市文化財課長	和	田	芳	律			
〔調査事務局〕	同課副課長	常	盤	公	生			
	同課主幹	矢	部	喜	多	夫		
	同課副主幹	桑	畑	光	博			
〔作成担当者〕	同課主査	米	澤	英	昭			

II 遺跡の位置と環境

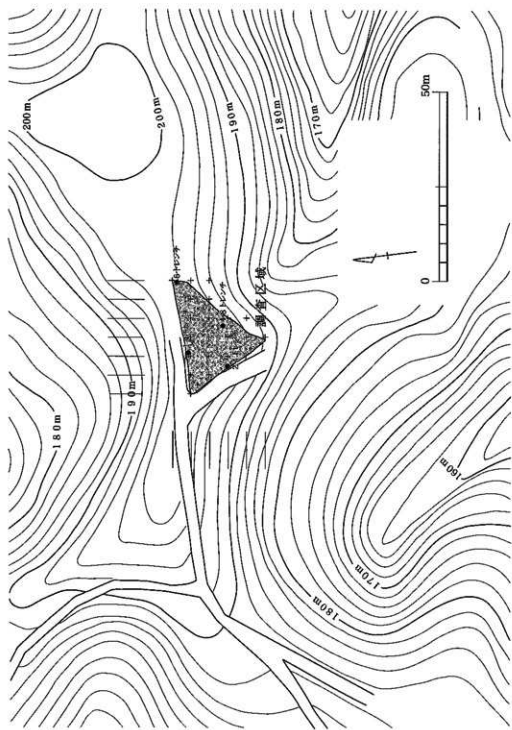
高八重遺跡は、都城市高城町有水に所在する。大淀川の東部に接する有水地区西部一帯は、大淀川の支流有水川に繋がる永山川などの小河川による浸食によって形成された台地が近接して点在している。その一つが県営ほ場整備事業に伴う発掘調査によって発見された細井地区であり、それに東接するのが本遺跡の所在する丘陵部である。南側には永山川が西流し有水川へ合流しており、それを見下ろすように、丘陵頂部南側の急斜面に本遺跡は位置する。

近隣に所在する遺跡を挙げておきたい。西接する台地上にある細井地区遺跡群では、主に縄文中～後期にかけての住居群などが確認された。その他、縄文遺跡である上別府遺跡、香禪寺遺跡などが周辺に散在している。県指定史跡高城町古墳の14～16号、19・20・22・23号墳がある。そして16号墳周辺には地下式横穴墓（高取原地下式横穴墓）も散在しており、発掘調査例がある。また田尾集落内には複数の集石遺構を確認した木ノ下遺跡がある。



1. 高八重遺跡
2. 細井地区遺跡群
3. 上別府遺跡
4. 高城町古墳 19・20号墳
5. 高城町古墳 14号墳
6. 高城町古墳 15号墳
7. 高城町古墳 16・17号墳
8. 香禪寺遺跡
9. 高取原地下式横穴墓
10. 鳥井原第2遺跡
11. 高城町古墳 21・22号墳
12. 木ノ下遺跡

第1図 遺跡位置図



第2図 調査区域及び試掘トレンチ配置図

Ⅲ 調査の記録

1 調査の概要

調査においては、先述のとおり、縄文早期の遺跡を確認した。

調査区は山頂部から南東方向へ急斜する部分にあたる。傾斜が急度となる面から遺構が確認され、集石遺構6基、土坑3基を検出した。集石遺構は、浅い土坑に礫が敷き詰められた、楕円形を呈するものである。各集石内からは黒曜石の剥片が数多く出土した。土坑については、SC02において、その床面が赤く硬くしまっている状態を確認した。SC03は埋土中に小礫が多くあり、もともと集石遺構であった可能性がある。遺物については、包含層、各遺構から土器、石器が出土した。土器は小片ながら、押型文系から塞ノ神式に至る、時間的な幅のある出土傾向がみられた。また石製品については、特に遺構内から剥片等が数多く出土した。

2 遺跡の層序

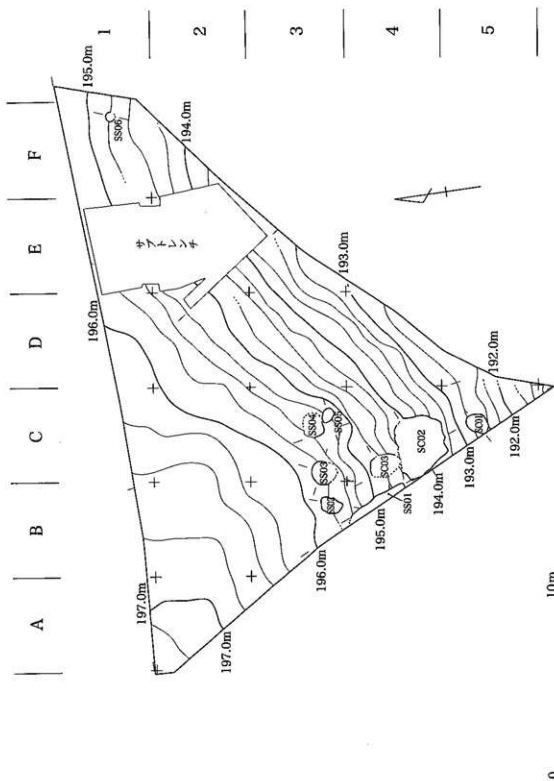
山岳地帯で傾斜もきつかったためか、平地における地層の状況とは若干異なるものの、地層の堆積は概ね良好といえた。Ⅱ層は11～13世紀に霧島山系より噴出した、いわゆる高原スコリアである。Ⅳ層は霧島山系御池より噴出した火山灰（通称黄ボラ）、Ⅵ層は鬼界カルデラより噴出した火山灰（通称アカホヤ）である。Ⅶ層は霧島ウシノスネ火山灰で、その下位に始良大隅軽石とみられるテフラを含む層（Ⅻ層）があり、この上に位置する層であるⅩ～Ⅺ層が当遺跡では遺物包含層である。主に縄文早期の遺構・遺物を確認した。

- 第Ⅰ層 表土
- 第Ⅱ層 灰白色軽石（高原スコリア）
- 第Ⅲ層 オレンジパミス混暗褐色土
- 第Ⅳ層 オレンジパミス（霧島御池火山灰）
- 第Ⅴ層 暗褐色弱粘質土
- 第Ⅵ層 アカホヤ火山灰
- 第Ⅶ層 霧島ウシノスネ火山灰

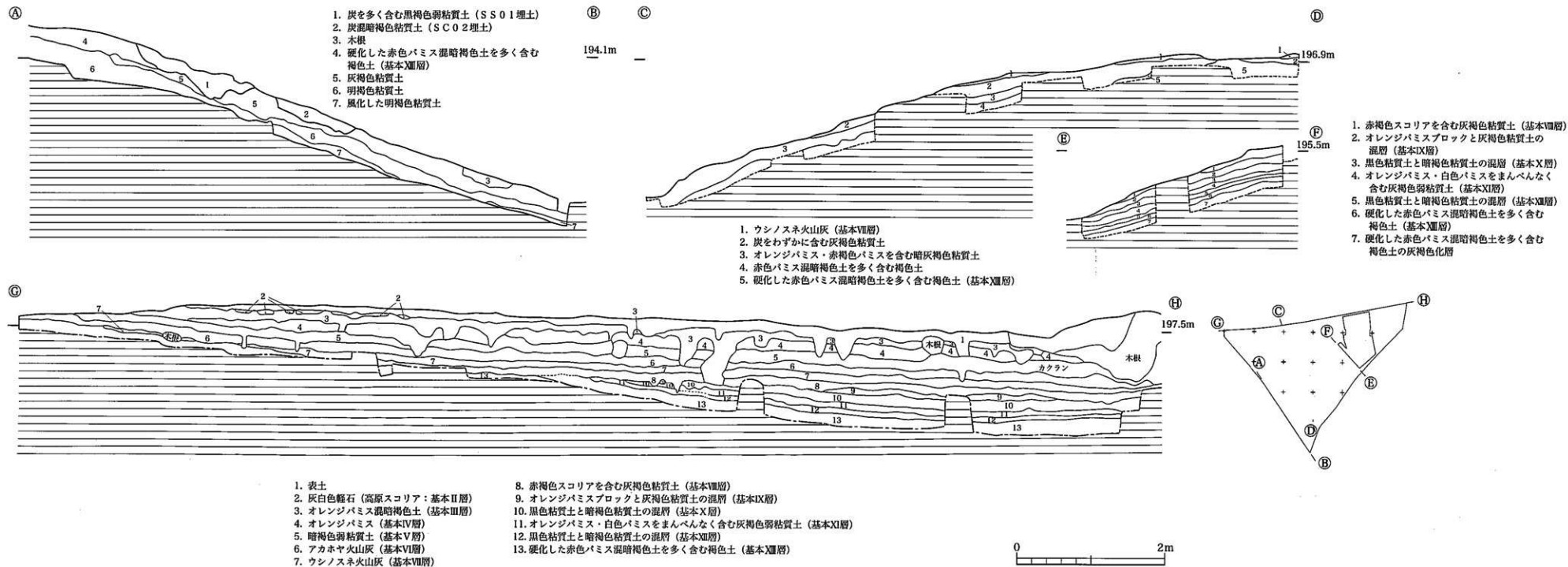
- 第Ⅷ層 赤褐色スコリアを含む灰褐色粘質土
- 第Ⅸ層 オレンジパミスブロックと灰褐色粘質土の混層
- 第Ⅹ層 黒色粘質土と暗褐色粘質土の混層
- 第Ⅺ層 オレンジパミス・白色パミスをまんべんなく含む灰褐色弱粘質土
- 第Ⅻ層 黒色粘質土と暗褐色粘質土の混層
- 第Ⅼ層 硬化した赤色パミス混暗褐色土を多く含む褐色土



図版1 基本土層写真



第3図 遺構配置図



第4図 土層断面図

3 調査の成果

原状は山林と農地で、山林はほぼ伐採済であった。対象面積約 28ha を試掘調査した結果、ほぼ中央の頂部南東面において縄文早期の遺跡の存在を確認した。原因者と協議のうえ、遺跡の存在する約 600~800 m² において本発掘調査を実施することで合意し、平成 19 年 4 月~6 月で調査を実施した。

調査においては、先述のとおり、縄文早期の遺跡を確認した。調査区は頂部緩斜面から南東方向へ急斜する部分にあたる。傾斜が急度となる面から遺構が確認され、集石遺構 6 基、土坑 3 基を検出した。遺物については、包含層、各遺構から土器、石器が出土した。土器は小片ながら、押型文系から塞ノ神式の型式に相当するもので、石製品については、特に遺構内から剥片等が数多く出土した。

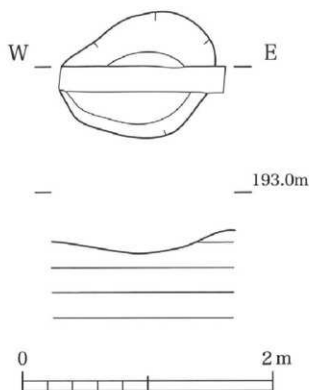
1号土坑 (SC01) 【第5図・第6図・第1表】

SC01は、調査区的最南端、C-5区で検出した。東西方向に長いやや楕円形を呈する浅めの遺構である。長径1.25m、短径1m、検出面からの深さ約0.15mを測る。埋土にはわずかに礫や土器、石器が混入していた。出土遺物を第6図No1に掲載した。縄文土器の口縁部で、ゆるやかに外反する器形である。口唇部には斜位に縄文が施されている。外器面には貼り付けられた突帯にわずかに縄文の施文がみられる。突帯間の凹線部は斜位の縄文がなされた後に横位にナデ調整がなされている。内器面はミガキ調整がうかがえるが、剥落部分が多い。手向山式の末期か、妙見式の初頭頃に相当すると思われる。

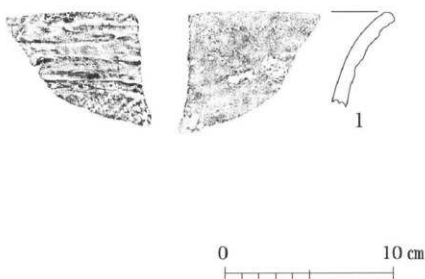
2号土坑 (SC02) 【第7図・第8図・第9図・第2表・第3表】

SC02はB-4区からC-4区にかけて検出した。この遺構は試掘調査時において露頭に既にみえていたものである。西側の端部については既に欠損している可能性がある。また北側にあるSC03とは重複しており、断面確認において、わずかにSC02が先行すると思われる。形状は方形に近いが、東側がやや張り出し、楕円状に近くなっている。南北径が2.65m、東西径が約3m、検出面からの深さは0.5~0.7mを測る。床面はそのほとんどが硬化しており、表面観察や断面観察でも赤色化している様子が看取できる。そして北東隅にはほぼ円形を呈する土坑状の遺構が重複しており、この深さは1.5m程度と格段に深い。これとの先後が明確ではないが、この深い円形土坑の床面付近で押型文新段階の鉢形土器胴部(第7図No3)が出土している。

図示し得る出土遺物を第7図のNo2~16、第8図のNo17~24に示した。2は縄文土器の口縁部。口唇部はやや内湾し、外器面には柳状施文具による押し引きの条線文がみられる。内器面は主に横位のミガキが施される。桑ノ丸式に相当する。3は円筒形土器の胴部か。外器面には山形の押型文が、縦位もしくはわずかに斜位に施文されている。内器面には斜位のミガキが丁寧になされている。胎土には白色鉱物やキンウンモが含まれる。土器型式は下刺形式に相当すると思われる。4は胴部片で、手向山式と考えられる。外器面には山形の押型文が施され、内器面はナデ調整(大半は摩耗か)がされている。5は妙見式と思われる鉢形土器の口縁部である。外器面には貼付突帯が3条みられ、突帯貼り付けの前に縄文で施文されている。器形はゆるやかな外反をみせる。6の口縁部は、口唇頂部に刻目があり、外器面には斜位でやや太目の縄文が施されている。器形はゆるやかな外反をなす。施文や器形から妙見式と思われる。7は胴部。外器面は斜位の縄文が施されているが、沈線らしき施文もみえる。内はナデ調整。これも妙見式構成である。8も妙見式の胴部か。3条の貼付突帯には縄文が施される。9の胴部も妙見式と思われる。貼付突帯には列点文がなされ、突帯以外の器面には縄文を斜位へ回転押捺した後ナデ調整をしているか(やや摩耗)。内器面は横位方向のケズリ調整がある。10は妙見式の胴部と思われる。内器面はナデ調整。外器面は縦位の貼付突帯に縄文が施され、また横位の突帯が非対称に貼り付けられ、間を縄文が埋める文線構成である。11の口縁部は器壁がやや厚めで、ゆるやかな外反がみられる。外器面には2条の貼付突帯があり、その突帯上には、摩耗しているが縄文が施文されている。手向山もしくは妙見式に相当するか。12は手向山式から平格式に相当するとみられる鉢の頸部である。貼り付けた突帯に刺突文を施し、突帯間は横位のナデ調整している。器形が外反する。13は平格式の口縁部である。口唇部は玉縁状に肥厚させ、口唇頂部には山形の刻目を施す。外器面には山形の条線文が付けられている。14の胴部は貝殻腹縁による刺突で象られている。15の胴部は摩耗が著しいが、縄文が施文されているようである。16の胴部は連点文と沈線文が施されている。17~23は打製石器である。黒曜石製の17は下部が欠損している。同じく黒曜石製の18



第5図 SC01 実測図



第6図 SC01 内出土遺物実測図

No.	出土位置	種別	部位	手法・文様		色調		備考
				外面	内面	外面	内面	
1	SC01	縄文土器	口縁部	貼付突帯・斜位の縄文・口唇に斜位の縄文	ミガキ(磨耗)	暗褐色 7.5YR3/3	暗褐色 7.5YR5/8	手向山or妙見式

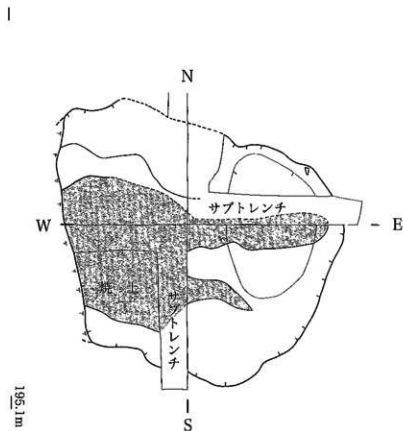
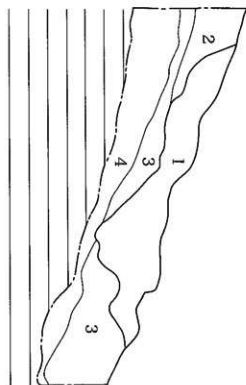
第1表 SC01 内出土遺物観察表

は完形。19 は片側が欠損。20 は頭部が消失している。21・22 は安山岩製である。23 はわずかに頭部が欠損しているが、やや大きめの鎌である。24 は黒曜石の石核。

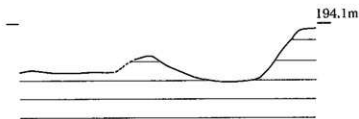
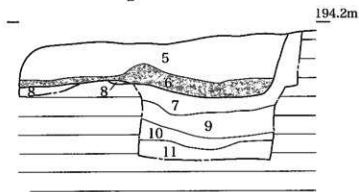
3号土坑 (SC03) 【第10図・第11図・第4表】

SC03は傾斜の急なC-4区で、SC02と切り合って確認した。SC02との時期的関係は明確ではない。わずかにSC03が遅れるかもしれない。わずかに南北に細長く、南北径3.3m、東西径約2.35mを測る。埋土は包含層のなかでもさらに黒みがかかった色調で、深さは0.6m程度ある。本土坑内には多くの黒曜石製剥片が含まれていたが、礫も多く、本来は集石遺構であった可能性が高い。また床部が2ヶ所確認でき、もともと2基の集石遺構であった可能性がある。

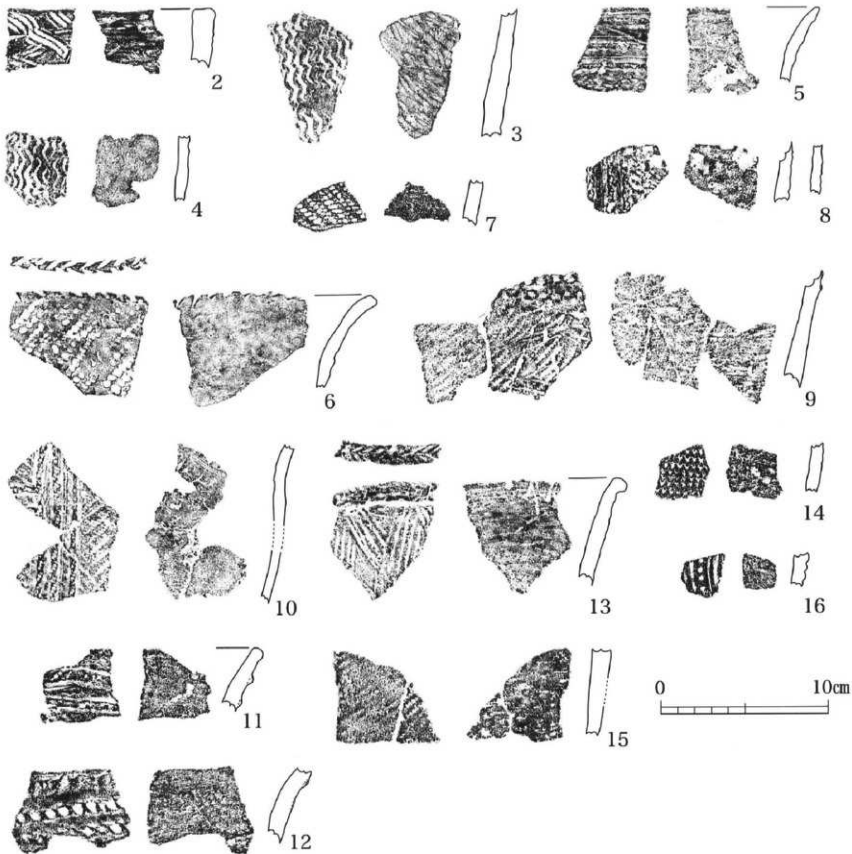
出土遺物は第11図No. 25～29である。25～28はSC02と重複する部位で出土したものであるが、ここではSC02より時期的に遅れるSC03のなかで掲載する。25は口縁部である。ゆるやかに外反する器形をなす。外面には4条の貼付突帯がある。摩耗によるものか、突帯上に縄文の施文はみられない。内器面は、ミガキ調整がなされ口唇端部には斜位状に縄文が施されている。手向山～妙見式と思われる。26は妙見式の口縁部である。口唇部に突帯が貼り付けられ、頂部には山形の刻目がある。口唇下には縄文を施文し、さらに突帯を貼り付け刺突文をなす。また胎土にはキンウンモがおびたしい。27は妙見式の胴部。外面には縦位・横位の突帯が貼り付けられ、刻目がなされる。その刻目はおそらくは縄文であろう。縦位の突帯は瘤状突起につながる。以外は全体的に縄文が施文される文様構成である。ススが付着する。内器面ではナデ調整に、やや粗雑なミガキがみられる。28は胴部か。斜位状に貼り付く4条の突帯に縄文で刻みが入る。以外には斜位の縄文を施文。やや摩耗気味か。内器面も摩耗気味だが、一部にミガキが残る。妙見式にあたると思われる。29は胴部。外面には山形の押型文が押捺されている。ススの付着もみられる。押型文の新相段階に類似する。



1. 炭を多く含む黒褐色粘質土
2. 硬化した赤色バミス混暗褐色土を多く含む褐色土 (基本XII層)
3. 灰褐色粘質土
4. 明褐色粘質土
5. 炭混暗褐色粘質土
6. 赤褐色土ブロック混赤褐色土 (焼土)
7. 灰褐色粘質土
8. 硬化した赤色バミス混暗褐色土を多く含む褐色土 (基本XII層)
9. 礫・アワオコシブロック混暗褐色土
10. 褐色粘質土
11. 灰白色砂質土混灰褐色土



第7図 SC02 実測図



第 8 図 SC02 内出土遺物実測図(1)

No.	出土位置	種別	部位	手法・文様		色調		備考
				外面	内面	外面	内面	
2	SC02	織文土器	口縁部	条線文(黒水縞)	ミガキ	黒縞 10YR3/1	明黄縞 10YR6/6	条ノ丸式
3	SC02	織文土器	胴部	山形押型文	ミガキ	明縞 7.5YR5/6	明黄縞 10YR6/6	下割盤式 胎土にキンクン
4	SC02	織文土器	胴部	山形押型文	ナデ(摩耗)	黄縞 2.5YR4/4	黄縞 5YR3/2	手向臼式
5	SC02	織文土器	口縁部	貼付突帯に織文・ナデ・口唇に刷目か	ナデ(剥落)	明黄縞 10YR5/6	明黄縞 10YR6/6	砂見式
6	SC02	織文土器	口縁部	斜位の織文・口唇に刷目	ナデ	明黄縞 10YR5/6	明黄縞 10YR6/6	砂見式
7	SC02	織文土器	胴部	斜位の織文・沈縷?	ナデ	黒縞 10YR3/2	黄縞 10YR5/8	砂見式
8	SC02	織文土器	胴部	3染の貼付突帯に織文・ナデ(一部剥落)	ナデ	黄縞 5YR3/8	縷 7.5YR6/8	砂見式
9	SC02	織文土器	胴部	貼付突帯・ナデ・斜位の織文	ナデ・ケズリ	縷 5YR7/8	縷 5YR7/8	砂見式
10	SC02	織文土器	胴部	縦位・横位の貼付突帯・織文	ナデ	縷 2.5Y4/2	縷 10YR4/6	砂見式か
11	SC02	織文土器	胴部	貼付突帯・ナデ	ナデ	明黄縞 10YR7/6	縷 10YR2/1	手向Lion砂見
12	SC02	織文土器	胴部	貼付突帯に刷型文・ナデ	ナデ	黄縞 10YR3/6	縷 10YR7/4	手向Lion平刷
13	SC02	織文土器	口縁部	口唇肥厚帯に山形文・山形条線文	ナデ	黒縞 10YR3/2	明黄縞 10YR7/6	平刷式
14	SC02	織文土器	胴部	貝殻縷研突文	(摩耗)	明黄縞 10YR7/6	縷 10YR5/4	
15	SC02	織文土器	胴部	織文	ナデ	明赤縞 5YR5/8	明赤縞 5YR5/8	
16	SC02	織文土器	胴部	通点・沈縷文	ナデ	黄縞 10YR6/8	黄縞 10YR8/8	

第 2 表 SC02 内出土遺物観察表(1)

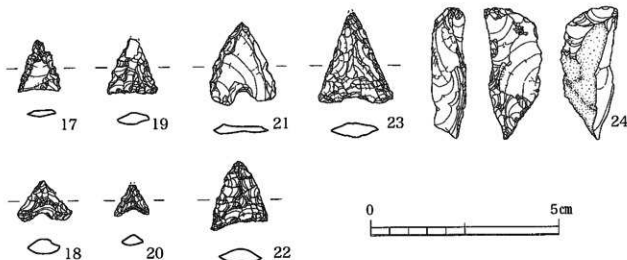
1号集石遺構 (SS01) 【第12図・第13図・第14図・第5表・第6表】

SS01はB-3区からC-4区にかけて確認した。この遺構は試掘調査時において露頭に既にみえていたもので、本調査の結果、西側半分がそれ以上は失われていたことがわかった。長径は6.5m、検出面からの最大深度は0.7mである。埋土はSC03と同様に黒色化していた。集石を除去すると下端が2ヶ所存在したため、時期関係は不明だが、おそらくは2基の集石であった可能性がうかがえる。南側の床面からは変形撚糸文の胴部 (第13図No.30) が出土しており、その時期的上限を示唆するものと思われる。

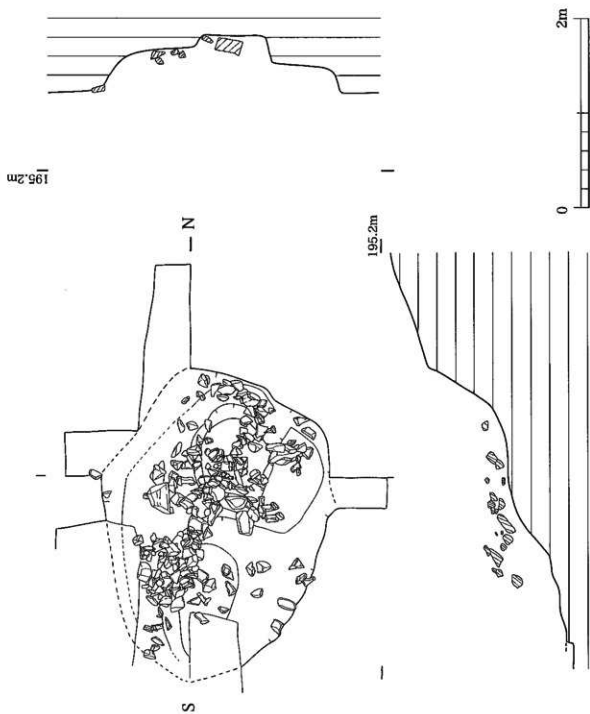
図示し得る出土遺物を第13図No.30~37、第14図38~43に掲載した。30は胴部である。撚糸文を縦位もしくは斜位に回転押捺している。2次的な被熱により摩耗し、剥落が大きい。31は口縁部。妙見式に近いと思われる。ゆるやかな外反がみられる。4条の突帯には摩耗しているが縄文が施文されている。突帯の下にも斜位の縄文がおそらく回転押捺され、突帯間の凹線部は横方向のナデ調整がなされている。口唇部には斜位の縄文がある。32は頸部に近い部位か。妙見式に相当する。内器面は剥落が甚だしい。胎土にキンウンモを含む。外器面は貼付突帯に縄文施文があり、これ以外には斜位または横位の縄文が配される。33は縄文施文後にナデ調整あり。内器面はナデ。妙見式相当の鉢形土器胴部か。34の胴部は胎土にキンウンモがある。外器面は沈線を交差させるような文様の構成である。35は胴部であるが、口縁部に近い部位か。平椀式に相当すると思われる。内器面はナデ調整で、外器面は沈線と連点文、瘤状突帯による文様構成が確認できる。36は胴部。内器面はナデ。外器面は撚糸文を施文後にナデ調整を施す。37は胴部。内器面にはナデ調整がなされている。また外器面は曲凹線による区画内に撚糸文を押捺して施文していることから、塞ノ神式にあたると思われる。38・39は黒曜石製の石鏃。39は頭部が欠損している。40~42は剥片である。40は使用痕のある剥片で、黒曜石製である。41は両辺が欠損している。42はチャート製で使用痕がみられる。43は黒曜石の石核である。

No.	出土位置	種別	番種	量				石材	備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (mm)	重量 (g)		
17	SC02	石鏃	石鏃	1.35	1.10	0.15	0.20	黒曜石	下部欠損
18	SC02内一插	石鏃	石鏃	1.00	1.45	0.40	0.40	黒曜石	側面一部欠損
19	SC02	石鏃	石鏃	1.45	1.30	0.30	0.40	黒曜石	頭部一部欠損
20	SC02	石鏃	石鏃	0.80	0.95	0.30	0.20	黒曜石	頭部一部欠損
21	SC02	石鏃	石鏃	2.15	1.75	0.25	0.80	安山岩	
22	SC02内一插	石鏃	石鏃	1.80	1.50	0.40	0.60	黒曜石	
23	SC02	石鏃	石鏃	2.40	2.00	0.40	1.40	安山岩	頭部一部欠損
24	SC02	石鏃	石核	3.45	1.50	0.90	4.00	黒曜石	

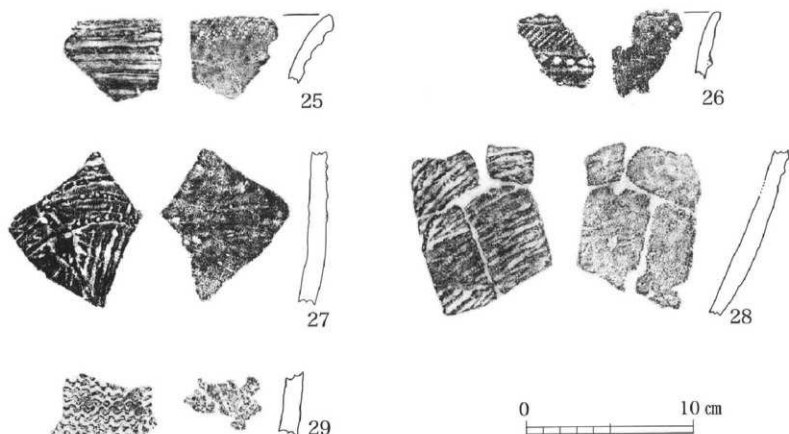
第3表 SC02内出土遺物観察表(2)



第9図 SC02内出土遺物実測図(2)



第 10 图 SC03 実測図



第11図 SC03内出土遺物実測図

No.	出土位置	種別	部位	手延・文様		色調		備考
				外面	内面	外面	内面	
25	SC02・03	織文土器	口縁部	4条の突帯・口唇直下に斜位の織文	ミガキ	黄 7.5YR6/8	黄 7.5YR6/8	手向ilice砂見
26	SC02・03	織文土器	口縁部	斜位の織文・頸目突帯文・ナデ	ナデ	黄褐 10YR7.5/6	黄褐 10YR7.5/6	砂見式 胎土にキンウシモ
27	SC02・03	織文土器	胴部	縦位、横位の頸目突帯文・斜位の織文	ナデ・ミガキ	黄 10YR2/1	明黄褐 10YR2/6	砂見式 外スス付着
28	SC02・03	織文土器	胴部	4条の胎付突帯・斜位の織文	ナデ・ミガキ	明黄褐 10YR2/6	明黄褐 10YR2/6	砂見式
29	SC03	織文土器	胴部	山形押型文	—	赤褐 5YR4/6	明赤褐 5YR4/6	押型文(新) 外わずかにスス付着

第4表 SC03内出土遺物観察表

2号集石遺構(SS02)【第15図・第16図・第7表】

SS02はB-3区にあり、急に傾斜するその端部、本遺跡のなかで最も高い標高に位置する。長径2.3m、短径1.7mであり、礫除去後には浅い土坑を確認した。検出面からの深さは0.3m程度を測る。床面中央部には大きめの礫が置かれ、配石状にもみえる。

出土遺物は第16図No.44・45に掲載した。ともに黒曜石製の石鏃未製品である。

3号集石遺構(SS03)【第17図・第18図・第8表】

SS03はB-3区～C-3区にあり、急に傾斜するその端部に位置する。SS02の東側にあたる。土坑を伴い、南北径2.6m、東西径2.4m、検出面からの深さ0.5mを測る。土坑の底部は地形の傾斜に沿う形で、やや北東寄りになっている。

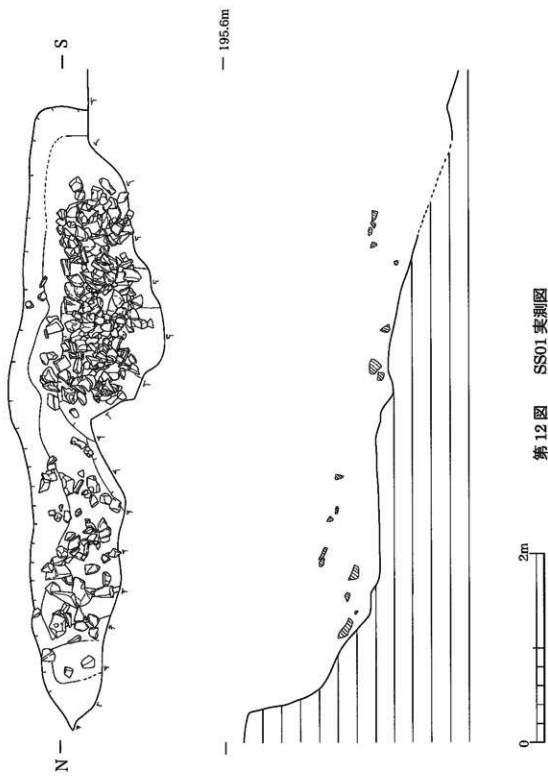
出土遺物を第18図No.46・47に掲載した。46はチャート製の石鏃で、重さは1.8g。47は使用痕のある黒曜石製の剥片で、挟りが入っている。

4号集石遺構(SS04)【第19図】

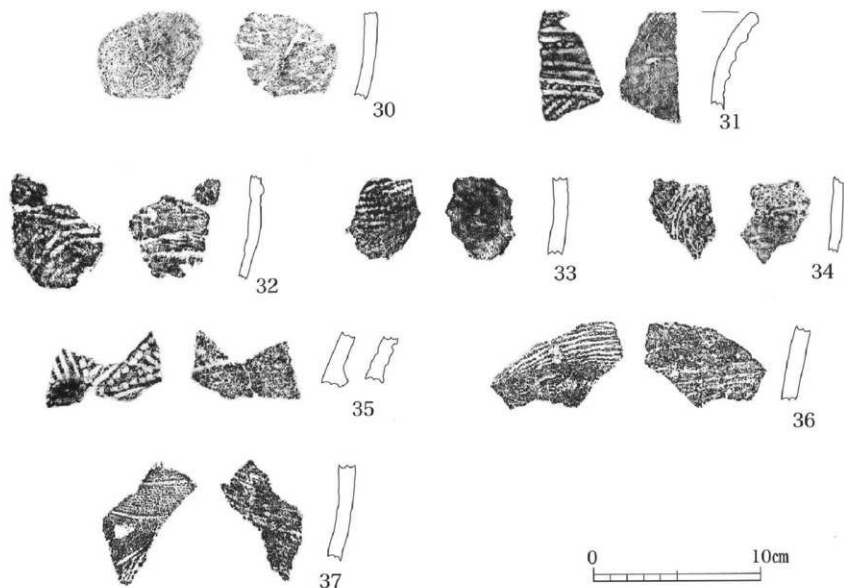
SS04はC-3区にあり、急に傾斜するその端部に位置する。SS03の東側にあたる。浅めの土坑を伴う。長径2.6m(推定)、短径2m、検出面からの深さ0.4mを測る。東側に大きく欠損しているが、集石そのものは西側に大きくよった形になっている。

5号集石遺構(SS05)【第19図】

SS05はC-3区にあり、急に傾斜するその端部に位置する。SS04と南接する。これも浅い土坑がある。長径1.5m、短径1.1m、検出面からの深さ0.4～0.5mを測る。床面付近には大きめの礫が配されている。



第 12 图 SS01 实测图



第 13 図 SS01 内出土遺物実測図(1)

No.	出土位置	種別	部位	手法・文様		色調		備考
				外面	内面	外面	内面	
30	SS01	縄文土器	胴部	撚糸文(流水線)	ナデ	黄褐色 10YR6/6	黄褐色 10YR5/8	黄砂撚糸文 外側溝欠
31	24T (SS01)	縄文土器	口縁部	胎付雲帯部に縄文・縄文・ナデ・1層に横文	ナデ	黄褐色 2.5YR/8	黒褐色 2.5Y3/2	砂見か
32	24T (SS01)	縄文土器	胴部	胎付雲帯・斜位の縄文	ナデ	赤褐色 5YR4/8	赤褐色 5YR4/8	砂見式 胎土にキンウンモ
33	24T (SS01)	縄文土器	胴部	斜位の縄文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	砂見式
34	24T (SS01)	縄文土器	胴部	浅線文・斜位の縄文	ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4	明黄褐色 10YR6/6	砂見式 胎土にキンウンモ
35	24T (SS01)・GT	縄文土器	胴部	斜交文・浅線文・瘤上突起	ナデ	黄褐色 10YR7/8	黒褐色 10YR3/1	平帯式?
36	24T (SS01)	縄文土器	胴部	撚糸文・ナデ	ケズリ?	黄褐色 10YR7/8	黄褐色 10YR7/8	籠ノ神式?
37	24T (SS01)	縄文土器	胴部	凹線文区画に撚糸文	ナデ	黄褐色 10YR7/8	黄褐色 10YR7/8	籠ノ神式?

第 5 表 SS01 内出土遺物観察表(1)

6号集石遺構 (SS06) 【第20図】

SS06はF-1区にある。礫は比較的少なく、南北径1m、東西径1mを測り、検出面からの深さは0.2~0.3mである。

包含層内出土遺物【第21図・第22図・第23図・第9表・第10表】

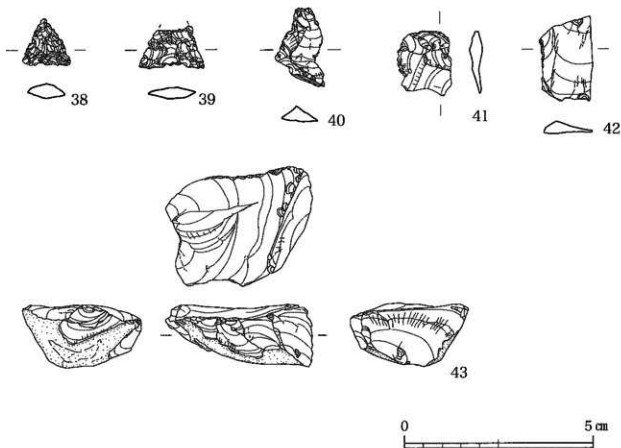
包含層中からは多量の礫が出土した。また、同層中では多くの黒曜石の剥片が確認され、縄文早期相当の土器片もともに出土した。

出土遺物を第20図・第21図 (No. 48~90 の土器)・第22図 (No. 91~105 の石器) に図示した。48は下剝峯式と思われる胴部。貝殻腹縁による刺突で施文している。49は円筒形深鉢形土器の口縁部か。内器面はナデ調整。外器面は口唇直下に横位の山形状の沈線を1条配し、以下に縦位の山形押型文を施す。口唇頂部には刻目をなす。胎土にはキンウンモを含む。桑ノ丸式と想定した。50は縦位の山形押型文を押捺する胴部である。51・52は変形の撚糸文を施文する胴部片。53は口唇頂部が欠損しているが、口縁部と思われる。ゆ

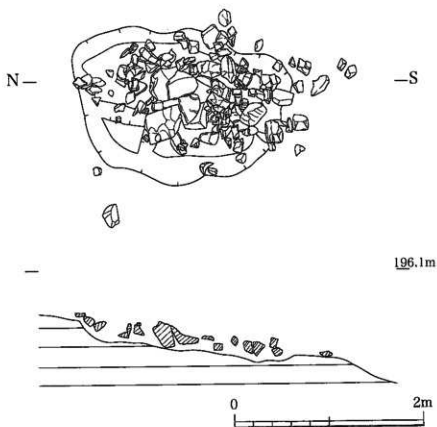
るやかに外反する器形をなし、幾何学様の沈線文が付されている。手向山式と思われる。54 は手向山式と思われる口縁部片。ゆるやかであるが、口唇にかけて外反気味の器形を呈す。口唇頂部には竹管状の施文具で付された刻目がある。内器面は摩耗のため調整は不明。55 は胴部。手向山式鉢形土器の「く」の字屈曲部に相当か。内面には横位のナデ調整がなされている。外面は山形状の短い沈線を施文している。56 は手向山式の胴部と思われる。外面には縦位の山形押型文を押捺している。57 は頸部か。外反する口縁に近い部位と思われ、口唇頂部が欠損している。内面の調整は横位のナデと考えられるが、外面はV字様の沈線と幾何学様の沈線を組み合わせた文様となっている。手向山式に相当するものと思われる。58 も57と同様である。59 は手向山式の胴部か。「く」の字屈曲部に相当すると思われる。内面はナデで一部ミガキがある。外面は屈曲部に突帯をめぐらし刻目があり、屈曲部より上には山形の押型文を施文している。60 も同様に手向山式系の胴部。内面は主にナデ調整で、一部粗いミガキがなされているところもある。外面は屈曲部に突帯をめぐらし、刻目を入れている。屈曲部から上部には沈線文が施されている。61 は口縁部である。外面には貼付突帯を付し、摩耗のため明瞭ではないが、突帯上に縄文を施文していると思われる。62 は妙見式とみられる口縁部である。ゆるやかに外反する器形をもつ。口唇頂部に刻目がみられる。内器面は剥落が多いものの、ミガキ調整痕が

No.	出土位置	類別	器種	法 量				石 材	備 考
				最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
38	24T (SS01)	石器	石鏃	1.25	1.30	0.35	0.40	黒曜石	
39	SS01内一箇	石器	石鏃	1.10	1.70	0.50	0.40	黒曜石	断面欠損
40	24T (SS01)	石器	銅片	2.10	1.30	0.40	0.80	黒曜石	使用痕あり
41	24T (SS01)	石器	銅片	1.70	1.40	0.35	0.80	黒曜石	2断面欠損
42	24T (SS01)	石器	銅片	2.25	1.40	0.35	1.20	チャート	使用痕あり
43	24T (SS01)	石器	石鏃	1.55	3.85	3.10	18.0	黒曜石	

第6表 SS01内出土遺物観察表(2)



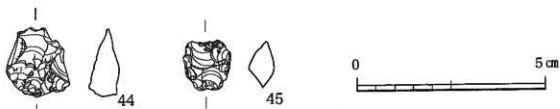
第14図 SS01内出土遺物実測図(2)



第15図 SS02実測図

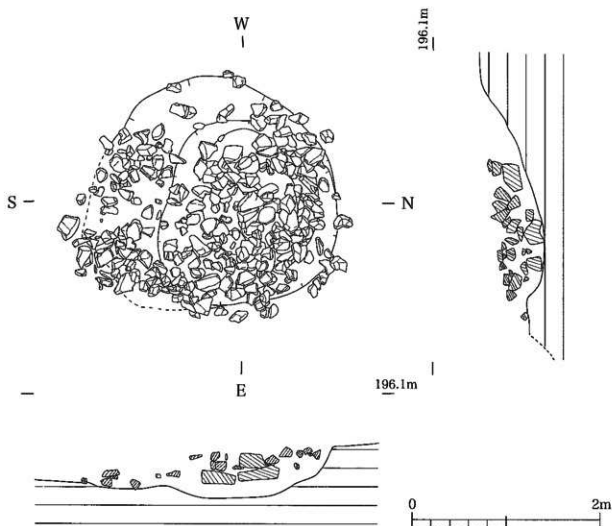
No.	出土位置	種類	器種	法 量				石 材	備 考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
44	SS02内一帯	石箭	石鏃未剥離	1.80	1.70	0.80	1.80	黒曜石	
45	SS02	石箭	石鏃未剥離	1.30	1.25	0.65	1.00	黒曜石	

第7表 SS02内出土遺物観察表

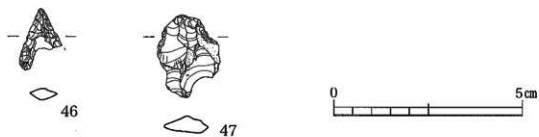


第16図 SS02内出土遺物実測図

わずかに確認できる。外面は縄文を施文後、突帯を貼り付けて縄文を押し、突帯間の凹線部は縄文をナデ消している。胎土にはキンウンモが含まれる。また、接合のための穿孔がある。63も妙見式の口縁部。被熱のためか全体的に剥落、摩耗している。器形はゆるやかな外反を呈す。胎土にキンウンモが含まれる。内面はミガキ。外面は口唇部とその下に1条の刻目突帯があり、以下に幾何学様の沈線文を配置する。64は妙見式の胴部。65は胴部。内器面には横位のナデがある。外器面は縦位の貼付突帯が2条あり、縄文が施されている。文様の構成から妙見式と考えられる。66も妙見式の胴部と思われる。粗く貼り付けられた突帯には縄文が押し、突帯の下位には縄文の施文がみられる。67も同様に妙見式の胴部。内面は横位のケズリで、外面には2条の突帯が縦位に貼り付けられ、斜位から下方へ回転押しした縄文がある。胎土にキンウンモを含む。68も妙見式の胴部。胎土にキンウンモが混じる。内器面はケズリかナデか不



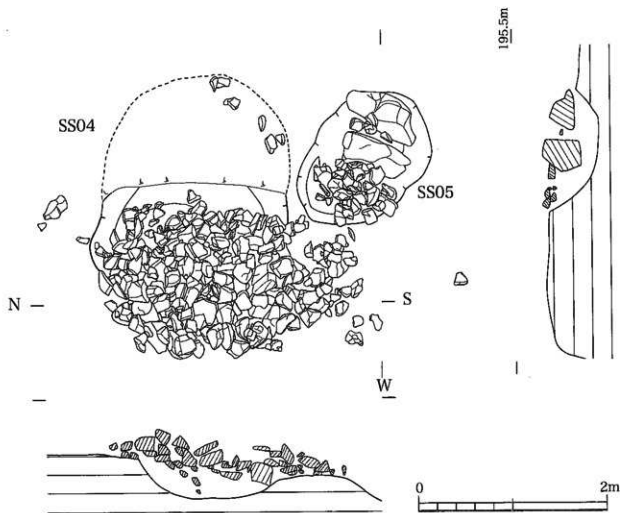
第 17 図 SS03 実測図



第 18 図 SS03 内出土遺物実測図

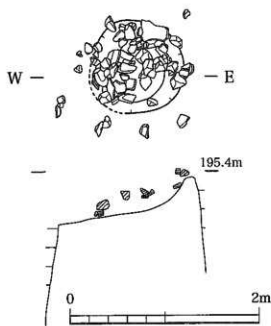
No.	出土位置	種別	群編	数				材質	備考
				最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
46	SS03内一括	石器	石鏃	1.60	1.10	0.30	0.40	チャート	表面検出 片断欠損
47	SS03内一括	石器	剥片	2.20	1.65	0.45	1.00	黒曜石	使用痕あり 誤り入り?

第 8 表 SS03 内出土遺物観察表

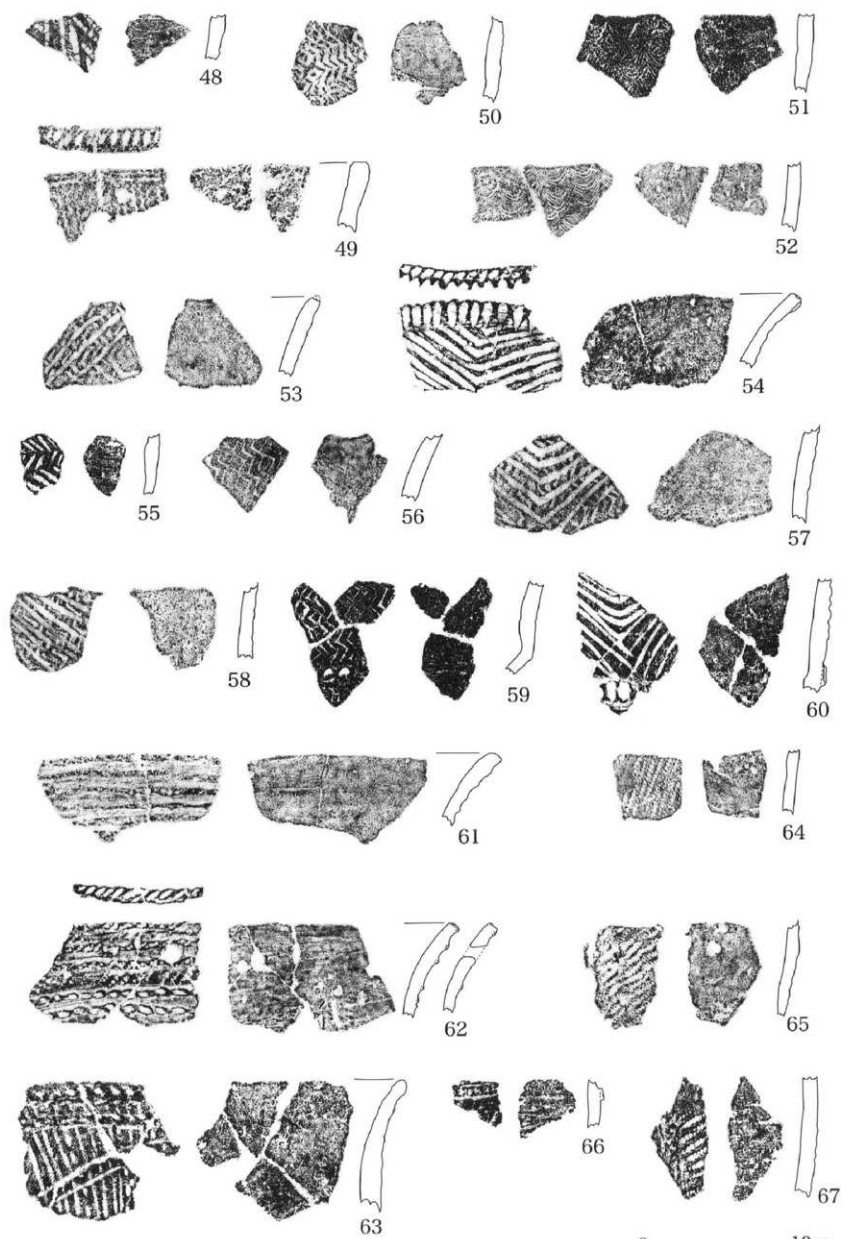


第 19 図 SS04・05 実測図

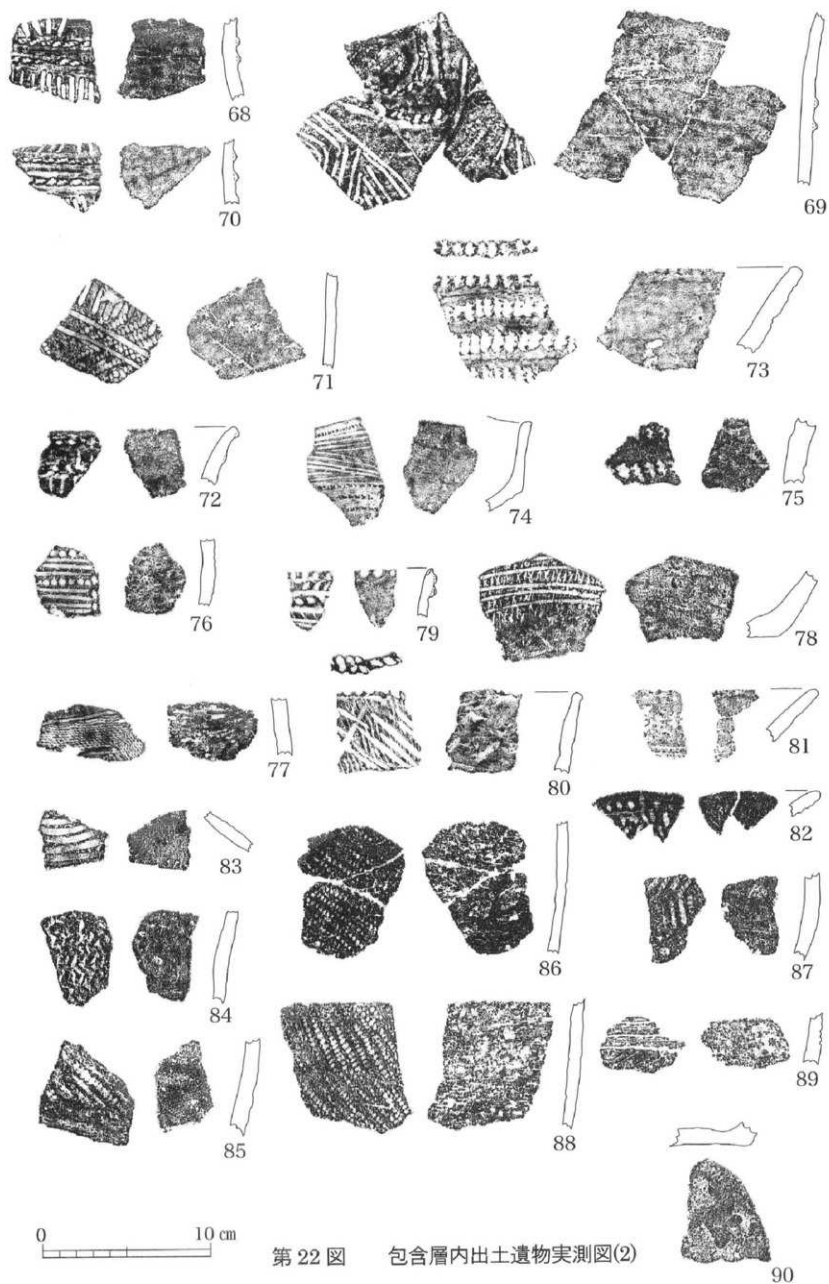
明瞭である。外器面は2条の貼付突帯上に縄文を施し、その突帯の上下には縦位または斜位の沈線を配する。69・70 はともに妙見式の胴部である。胎土にキンウンモを含む。内器面は横位にケズリ、後にミガキをかける。外器面は縄文を施した後、貼付突帯を付し縄文を施している。71 の胴部は、斜位に縄文を押し、その上に沈線文を配する。胎土にキンウンモがある。72 は口縁部。ゆるやかな外反を呈する器形。外器面は口唇とその直下に貼付突帯を付す。その突帯上に刻目がなされているが、縄文かどうかは摩耗のため不明瞭である。内面は摩耗や被熱による剥落のため調整は明瞭でない。胎土にはキンウンモがある。手向山式から平格式に相当するものとみられる。73 は塞ノ神式の口縁部か。内は横位のナデ調整。外はナデの後に横位に貝殻文を刺突する。口唇頂部には貝殻腹縁による刺突で刻目を施す。74 は塞ノ神IV式の口縁部か。口縁形態は山形もしくは波状で二重口縁を呈するものと思われる。小さな突帯に



第 20 図 SS06 実測図



第 21 图 包含層内出土遺物実測図(1)

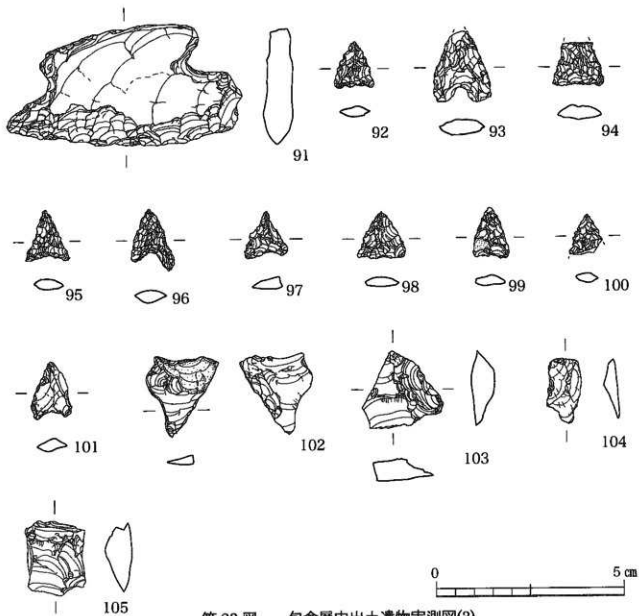


第 22 图 包含層内出土遺物実測図(2)

90

No.	出土位置	種別	部位	手 法 ・ 文 様		色 調		備 考
				丹 塗 用	丹 塗 用	丹 塗	丹 塗	
40	包含層	瓦文土器	胴部	具線刻文	ナゲ	黄	緑青焼 2.5YR6/5	下西築式
41	包含層	瓦文土器	口縁部	山形押線文・口唇に刻目	ナゲ?	黒 2.5YR3/1	黒 2.5YR3/1	内西築 黒ノ瓦式 跡土にケンランモ
42	包含層	瓦文土器	胴部	山形押線文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	押線文
50	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	赤 2.5YR4/4	赤 2.5Y7/4	赤点形赤文
52	包含層一帯	瓦文土器	胴部	赤点文 (赤点線)	ナゲ	明赤焼 10YR7/5	明赤焼 10YR7/5	赤点形赤文
53	0T一帯	瓦文土器	口縁部中	具線形赤点線文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	手向山式 口唇溝線欠損か
54	包含層一帯	瓦文土器	口縁部	山形の具線形赤点線文・口唇に刻目	ナゲ (黒焼)	黒焼 2.5Y3/2	黒焼 10YR3/1	手向山式
55	0T一帯	瓦文土器	胴部	山形の赤点文	ナゲ	黄 10YR6/5	黄 10YR6/5	手向山式
56	包含層	瓦文土器	胴部	山形押線文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	手向山式
57	0T一帯	瓦文土器	胴部?	具線形赤点線文	ナゲ	黄 10YR6/5	黄 10YR6/5	手向山式
58	0T一帯	瓦文土器	胴部?	具線形赤点線文	一 (黒焼)	にぶい黄焼 10YR7/4	黄 10YR5/2	手向山式
59	包含層	瓦文土器	胴部	山形押線文・山形赤点文	ナゲ?	黄 10YR6/5	にぶい黄焼 10YR6/4	手向山式 跡い線あり
60	包含層	瓦文土器	胴部	具線文・山形赤点文	ナゲ・ミガキ	黄 10YR2/1	黄 10YR2/2	手向山式?
61	包含層	瓦文土器	口縁部	赤点文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 10YR7/5	手向山0T赤点
62	包含層	瓦文土器	口縁部	山形赤点文・山形赤点文	ナゲ・ミガキ	黄 10YR6/5	黄 5YR5/5	跡見式 跡合の赤あり 跡土にケンランモ
63	包含層	瓦文土器	口縁部	赤点文	ミガキ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	跡見式 跡土にケンランモ
64	一帯	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	跡見式
65	12T一帯	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	跡見式
66	包含層	瓦文土器	胴部	山形赤点文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	跡見式
67	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ケズリ	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	跡見式 跡土にケンランモ
68	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ・ミガキ	黄 7.5YR5/5	黄 7.5YR5/5	跡見式 跡土にケンランモ
69	包含層	瓦文土器	胴部	山形赤点文	ナゲ	黄 7.5YR5/5	黄 7.5YR5/5	跡見式 跡土にケンランモ
70	一帯	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ・ミガキ	黄 7.5YR5/5	黄 7.5YR5/5	跡見式 跡土にケンランモ
71	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ・ケズリ	黄 10YR4/5	黄 10YR4/5	跡見式 跡土にケンランモ
72	包含層	瓦文土器	口縁部	山形赤点文	ナゲ?・ミガキ	明赤焼 10YR7/5	明赤焼 10YR7/5	手向山0T赤点
73	包含層	瓦文土器	口縁部	具線形赤点線文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	黒ノ瓦式
74	包含層	瓦文土器	口縁部	具線形赤点線文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	黒ノ瓦式 山形もしくは線状口縁
75	包含層	瓦文土器	胴部	具線形赤点線文	ナゲ	黄 7.5YR6/5	黄 10YR5/4	黒ノ瓦式
76	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文・山形赤点文	ナゲ	にぶい黄焼 10YR7/4	にぶい黄焼 10YR7/4	黒ノ瓦式
77	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ケズリ	明赤焼 2.5Y4/4	明赤焼 2.5Y7/5	黒ノ瓦式
78	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ケズリ	黄 10YR6/5	黄 10YR6/4	黒ノ瓦式
79	包含層	瓦文土器	口縁部	山形赤点文	ナゲ	黄 2.5YR7/1	黄 2.5YR7/1	黒ノ瓦式
80	包含層	瓦文土器	口縁部	赤点文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/4	黒ノ瓦式
81	包含層	瓦文土器	口縁部	赤点文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/4	黒ノ瓦式
82	包含層	瓦文土器	口縁部	具線形赤点線文	ナゲ	明赤焼 2.5YR6/5	明赤焼 2.5YR6/5	跡土にケンランモ
83	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	黄 2.5Y7/5	黄 2.5Y7/4	跡土にケンランモ
84	包含層	瓦文土器	胴部	山形押線文	ナゲ	黄 2.5YR6/5	黄 2.5YR6/5	跡土にケンランモ
85	12T一帯	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	黄 7.5YR7/5	黄 7.5YR7/5	跡土にケンランモ
86	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ケズリ	明赤焼 10YR7/5	明赤焼 10YR7/5	跡土にケンランモ
87	一帯	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ・ミガキ	黄 5YR4/2	黄 5YR4/2	跡見式? 跡土にケンランモ
88	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ケズリ	明赤焼 10YR7/5	明赤焼 10YR7/5	跡土にケンランモ
89	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	明赤焼 2.5YR6/5	明赤焼 2.5YR6/4	跡土にケンランモ
90	包含層	瓦文土器	胴部	赤点文	ナゲ	黄 10YR6/5	黄 10YR6/5	跡土にケンランモ

第9表 包含層内出土遺物観察表(1)

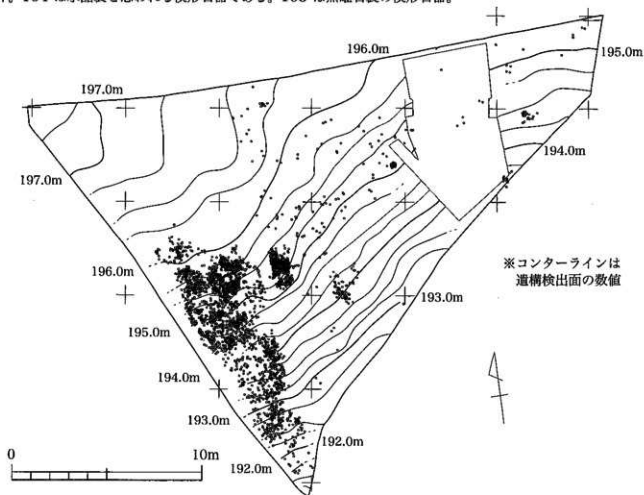


第 23 図 包含層内出土遺物実測図(3)

No.	出土位置	種類	器種	法 量			重量 (g)	石 材	備 考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)			
91	18丁	石屑	石核	3.20	6.25	0.80	15.20	安山岩	
92	包含層	石屑	石核	1.25	1.05	0.25	0.20	黒曜石	
93	包含層	石屑	石核	1.85	1.50	0.40	1.00	安山岩	顔部欠損
94	包含層	石屑	石核	1.15	1.40	0.40	0.50	黒曜石	顔部欠損
95	包含層	石屑	石核	1.35	1.15	0.25	0.20	黒曜石	
96	包含層	石屑	石核	1.55	1.15	0.35	0.40	黒曜石	
97	一括	石屑	石核	1.25	1.10	0.35	0.40	黒曜石	
98	包含層一括	石屑	石核	1.25	1.25	0.25	0.40	黒曜石	
99	包含層一括	石屑	石核	1.35	0.95	0.25	0.20	黒曜石	1側面欠損
100	包含層一括	石屑	石核	1.10	0.85	0.25	0.20	黒曜石	下半欠損
101	包含層	石屑	石核	1.55	1.10	0.35	0.40	チャート	
102	包含層	石屑	剥片	2.15	1.95	0.25	1.00	黒曜石	二次加工痕あり
103	包含層	石屑	剥片	2.05	2.15	0.50	2.00	黒曜石	
104	包含層	石屑	楔形石屑	1.70	0.90	0.40	0.40	水 晶	
105	包含層	石屑	楔形石屑	2.00	1.50	0.70	2.00	黒曜石	

第 10 表 包含層内出土遺物観察表(2)

細かな刻目を付す。突帯間には横位または斜位に沈線文を施す。75は塞ノ神式の胴部か。内器面にはナデ調整がなされ、外器面には貝殻腹縁を横位方向へ刺突している。76は胴部である。竹管状施工による連点文と沈線で文様を構成する。塞ノ神式に相当すると思われる。77は塞ノ神式の胴部か。内器面は横位のケズリ。外器面は波状の沈線区画内に燃系文を施文している。78は底部。縦位の燃系文を施し、その上に横位に沈線文を配する。内はケズリ。塞ノ神式にあたとみられる。79は口縁部である。口唇頂部内外器面に刻目がある。口唇直下に2条の突帯を付し、刻目をなしている。以下は沈線文を施す。80の口縁部は、口唇頂部に刻目があり、外器面には縦位の燃系文に斜位の縄文を重ねている。81は口縁部。口唇部に刻目があり、外器面には不明瞭だが貝殻文がみえる。内にはナデ調整がなされる。胎土にキンウンモを含む。塞ノ神式か。82は大きく外反する器形を呈する口縁部である。外器面には刺突文が施文されている。内器面は剥落のため不明。83は頸部か。内は横位のナデ調整がなされる。横位の凹線文が施されている。84は胴部。粘上ひもの縞目か明瞭で、内器面の調整は粗雑である。横位のナデ調整がみえる。外器面は縦位に山形の押型文を施文している。85は底部に近い胴部か。胎土にキンウンモを含む。内はナデ、外は縄文が施文されている。妙見式に相当するかもしれない。86は胴部。胎土の色調が明るめだが、やはり妙見式か。85と同様に胎土にはキンウンモが混じり、外は斜位の縄文で施文されている。内は横位のケズリ調整である。87は胴部。縄文を山形に施文する。胎土にはキンウンモが含まれる。88は86と同様。89は胴部。胎土にキンウンモあり。外器面は横位の条線文帯であり、内器面は粗雑なナデ調整がなされる。90は底部。91は石匙である。把手と刃部は両側からの挟りによって分けられている。刃部は打製によってつくりだしている。安山岩製で、重さ15.20gを測る。92は黒曜石製の石鏃。93は安山岩製の石鏃。頭部は欠損している。94は黒曜石製の石鏃で、頭部が欠損している。95は黒曜石製の石鏃。重量は0.20g。96~100も黒曜石製の石鏃。99は側辺を、100は下部を各々失っている。101はチャート製の石鏃。102は二次加工痕のある黒曜石製剥片。103は黒曜石製剥片。104は水晶製と思われる楔形石器である。105は黒曜石製の楔形石器。



第 24 図 包含層内出土礫（散石）分布図

高八重遺跡出土石器について

高八重遺跡では石鏃、石匙をはじめ、砕片まで含めると、計1173点が出土した。遺構内及び包含層出土石器の一部については先述のとおりである。ここでは、図化できなかった石器を含め、高八重遺跡出土石器について簡単にまとめておく。

まず、遺構ごとの組成については、第11表のとおりである。石器類が最も多く出土したのはSC02で、石鏃、剥片類、石核、原石、砕片である。また、SS01は他の遺構に比べ、製品や石核・原石に対する剥片の割合が少ない。また、全体的に集石内からの石器類の出土は少ない。

遺跡内出土の石器組成であるが、全体的に製品が少なく、製品の中で最も多いのは石鏃である。また、剥片には下縁や側縁に微小剥離痕が認められる剥片や、二次加工を施す剥片の割合が高い。

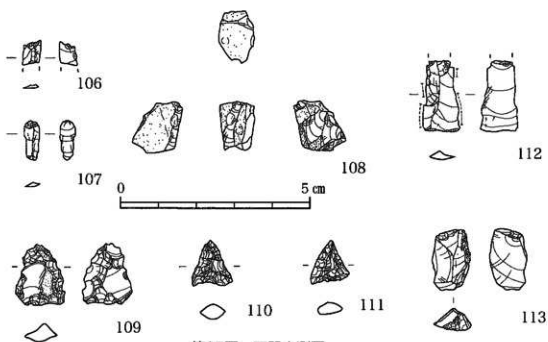
遺跡内出土石器類の石材については一覧に示したように、黒曜石が大半を占める。特に、黒曜石Aが最も多く、次いで黒曜石Bが多い。その他、チャート、安山岩、流紋岩、水晶が用いられている。

次にこれらの属する時期についてであるが、高八重遺跡は急傾斜地に立地しており、土層の堆積も不安定な部分が多い。大半の石器については、遺構内の土器との共伴関係及び礫形鏃の存在などからも縄文時代早期中葉から後葉に属すると考えられる。しかし、一部の石器については、旧石器時代終末～縄文時代草創期に属する可能性が有る(106～111)。106・107は細石刃と考えられる。106は下部が折れている。この他、図示していないが、細石刃と思われる資料が10点ほど出土している。108は小型の原石の一端から剥離を行っているものである。石核調整はほとんど行われていない。109は剥片の周縁に簡易な加工を施した石鏃で、剥片の素材面を大きく残し、素材の厚みが残るものである。110・111は小型の三角鏃で厚みがある。このように、小型で厚みのある三角鏃(38・92・95・97・98)や素材面や原石面を大きく残すもの(17・99・100)については早期以前に遡る可能性がある(宮崎県清武町教育委員会 秋成雅博氏御教授)。112は小型の剥片で両側縁に使用痕が認められる。下部に原石面を有する。偶発的な石刃とも考えられるが、参考資料として示しておく。113は側縁と下縁に急角度の加工を施したもので、下縁の刃角が75°で、非常に小型である。時期は石材から縄文早期以降と考えられるが、同様の石器が他に2点、小型の剥片の下縁に微小剥離痕が認められるものも数点出土しているため、高八重遺跡においてはこのような小型石器をスクレイパーとして使用していたと考えられる。

高八重遺跡では、遺跡に持ち込まれた黒曜石の原石の大きさが2cm前後のサイコロ状で非常に小さい資料が多いことである。よって、剥片自体も小さく、原石面の残る資料が多い。また、少量ではあるが、原石1つから石鏃1つを製作したと考えられる資料(欠損品のため未掲載)も認められる。このように遺跡に最も多く持ち込まれた黒曜石は原石の大きさに制限を受けた結果、全体的に小型の資料が多い。それに比べ、石匙はやや大きめの安山岩製1点であり、また、同じ石鏃でも安山岩製に比べ、黒曜石製の資料が小さいことが窺える。

	SC01	SC02	SC03	SC02-03	SS01	SS02	SS03	SS04	SS05	SS06	包含層	計
石鏃(未製品)	0	12	0	0	2	(2)	1	0	0	0	19 (3)	39 (5)
石匙	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
スクレイパー	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	7
楔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
剥片	0	3	2	4	14	0	0	0	0	0	23	46
使用痕有り剥片	0	9	0	0	14	1	1	2	0	0	90	117
加工痕有り剥片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	20
石核	0	2	0	0	2	2	1	0	0	0	10	17
原石	0	4	0	1	2	0	0	0	0	0	8	15
砕片	14	167	49	11	29	26	24	4	8	0	577	909
計	15	196	51	16	64	31	27	6	8	0	758	1173

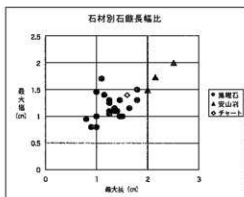
第11表 遺跡内出土石器組成一覧



第25図 石器実測図

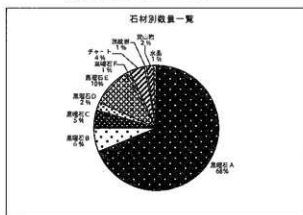
第12表 石器計測表

No.	出土位置	器種	法量 (cm, g)			
			最大長	最大幅	最大厚	重量
106	SC01	細石刃	0.65	0.5	0.15	—
107	SC03	細石刃	0.95	0.4	0.15	—
108	包含層	細石核?	1.3	0.95	1.3	1.7
109	南壁一括	石核	1.6	1.3	0.45	0.8
110	包含層	石核	1.15	1	0.3	0.2
111	包含層	石核	1.2	1.05	0.4	0.2
112	包含層	剥片	1.9	1	0.55	0.4
113	南壁一括	スクレイパー	1.6	1	0.6	0.7



第13表 未図化石鐵計測表

No.	出土位置	法量 (cm, g)			
		最大長	最大幅	最大厚	重量
942	SC02	1.45	1	0.25	0.4
1605	SC02	1	1	0.05	0.2
1605	SC02	1.2	—	0.15	0.2
1608	SC02	1.45	1	0.45	0.5
1477	SC02	—	—	0.1	0.3
103	包含層	—	—	0.15	0.1
640	包含層	0.8	—	0.05	0.2
70624	SC02	1.8	1.3	0.2	0.7
673	包含層一括	1.5	1	0.05	0.3
274	包含層	2.2	—	0.5	1.1
224	包含層	1.3	—	0.2	0.4



黒曜石 A：暗灰色～鉛色。流理構造があるものも含む。
 黒曜石 B：黒っぽい。やや光を透過する。黒粒子や流理構造あり。
 黒曜石 C：黒っぽい。黒～黒灰色の鈍い質感の流理構造を持つ。
 黒曜石 D：暗灰色。透けない。
 黒曜石 E：灰白色～暗灰色。ザラザラした質感で透けない。
 黒曜石 F：真黒で、不純物を含む。

IV 都城市、高八重遺跡におけるテフラ（火山灰）分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

南九州地方に位置する都城市域には、始良、鬼界、阿多、池田などのカルデラ火山のほか、霧島や桜島など成層火山の噴火に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く分布している（たとえば早田、2006）。これらのテフラの中には、すでに層位や噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それとの層位関係を遺跡で求めることによって、遺構や遺物包含層の層位や年代に関する資料を収集できるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層やテフラさらに遺構などが検出された高八重遺跡の発掘調査区においても、現地で調査を行って上層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行い、指標テフラの検出同定を実施して、テフラ層と指標テフラの同定を行い、遺物包含層の遺構の層位や年代に関する資料を求めることになった。調査分析の対象となった地点は、南北セクション（SP01）および調査区北壁の2地点である。

2. 土層の層序

(1) 南北セクション（SP01）

南北セクション（SP01）では、下位より固結した赤褐色スコリア層（層厚5cm以上、スコリアの最大径5mm、石質岩片の最大径4mm）、赤褐色スコリアを多く含む黄褐色土（層厚8cm、スコリアの最大径6mm）、赤褐色スコリアを多く含む黄褐色土（層厚8cm、スコリアの最大径5mm）、黒灰褐色土（層厚15cm）、黄色軽石混じり黄灰色土（層厚14cm、軽石の最大径11mm）、灰褐色土ブロック混じり黒灰褐色土（層厚31cm）、黄色軽石ブロック混じり黄灰色土（層厚13cm、軽石の最大径3mm）、わずかに灰色がかかった褐色土（層厚15cm）、青灰色砂質細粒火山灰層（層厚8cm）、灰色がかかった青色砂質細粒火山灰層（層厚10cm）、成層したテフラ層（層厚32cm）、褐色土（層厚12cm）、黄色軽石層（層厚25cm、軽石の最大径26mm、石質岩片の最大径7mm）、黄色軽石混じり褐色土（層厚13cm、軽石の最大径6mm）、灰褐色土（層厚7cm）、褐色スコリア層（層厚7cm、スコリアの最大径9mm）、褐色スコリア混じり暗灰色土（層厚10cm、スコリアの最大径4mm）が認められる。

これらのうち、最下位の赤褐色スコリア層は、その層相から、約4～4.5万年前に霧島火山から噴出したと推定されている霧島アワオコシテフラ（Kr-Aw, 遠藤ほか, 1962, 町田・新井, 2003）と考えられる。また、成層したテフラ層は、下位より褐色火山豆石層（層厚2cm、火山豆石の最大径5mm）、正の級化構造をもつ黄色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm）、正の級化構造をもつ橙色砂質細粒火山灰層（層厚27cm）からなる。このテフラ層は、層相から約7,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah, 町田・新井, 1978）に同定される。

K-Ahの下位にある青灰色または灰色がかかった青色砂質細粒火山灰層は、層位や層相から、約7,300～7600年前に霧島火山から噴出した霧島牛のスネテフラ下部（Kr-USL, 井ノ上, 1988, 早田, 1997, 奥野, 2002）に同定されよう。一方、K-Ahの上位の黄色軽石層については、層位や層相から、約4,600年前に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池テフラ（Kr-M, 町田・新井, 1992, 2003, 奥野, 1996）に同定される。

(2) 調査区北壁

調査区北壁では、成層したテフラ層（層厚28.4cm）の上部を切って形成された土層が認められる。成層したテフラ層は、下位より粒径がよく揃った黄色細粒軽石層（層厚5cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、黄色軽石層（層厚13cm、軽石の最大径7mm、石質岩片の最大径3mm）、黄色軽石質粗粒火山灰層（層厚1cm）、黄色軽石層（層厚8cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm）からなる。

一方、その上位の土層は、下位より黄褐色土（層厚7cm）と炭化物混じりの灰色がかかった褐色土（層厚14cm）からなる。これらの土層からは、縄文時代の集石遺構が検出されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

南北セクション（SP01）と調査区北壁において採取された試料のうち、11点についてテフラ検出分析を行い、含まれるテフラ粒子の定性的な特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。南北セクション（SP01）の試料の中では、試料10に細粒の白色軽石（最大径2.1mm）が少量含まれている。また、この試料には、白色や透明の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。試料2には、軽石型や平板状のいわゆるパブル型の火山ガラスが比較的多く含まれている。それらの色調は、白色、無色透明、淡褐色である。試料1のテフラ層には、灰褐色スコリア（最大径6.8mm）が非常に多く含まれている。また、灰褐色、褐色、暗灰色のスコリアの細粒物である火山ガラスが比較的多く含まれている。

調査区北壁の試料2および試料1には、白色の軽石型火山ガラスが多く含まれる。なお、野外で認められた本試料中の粗粒の軽石粒子については、処理の過程で粉砕するためにここでは検出されない。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と方法

テフラ検出分析の対象となった調査区北壁の試料2を対象に、含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率装置（京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000）により屈折率（ n ）の測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。調査区北壁の試料2に含まれる火山ガラス（40粒子）の屈折率（ n ）は、1.498-1.499である。

5. 考察

屈折率測定の対象となった調査区北壁の成層したテフラ層については、火山ガラスの屈折率から、始良カルデラから噴出したテフラと考えられる。可能性のあるものとしては、古い順に約4.5～5万年前の始良岩戸テフラ (A-Iw, 町田, 1977, Nagaoka, 1988, 町田・新井, 2003)、約3.25万年前の始良大塚テフラ (A-Ot, Nagaoka, 1988, 町田・新井, 2003)、約3.1万年前の始良深港テフラ (A-Fm, Nagaoka, 1988, 町田・新井, 2003)、約2.6～2.9万年前の始良大隅軽石 (A-Os, 荒牧, 1969, Kobayashi et al., 1983, 町田・新井, 2003) があげられよう。

ただ、このテフラ層の層位は、南北セクション (SP01) の試料2が採取された土層にほぼ相当すると考えられることから、Kr-Awより上位にあると考えられ、問題のテフラ層はA-Iwの可能性はないと思われる。また、遺跡周辺の谷部の露頭における観察の結果、A-Osの下部に層厚7～11cmの風化した軽石質粗粒火山灰層が認められ、問題のテフラ層の下部のユニットに対応するようにみえる。

以上のことから、調査区北壁の試料2が採取されたテフラ層については、A-Osに同定される可能性が高い。また、その下位の土層中に濃集した黄色軽石については、層位からAs-Fmと思われる。今回、検出が期待された約1.28万年前に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ (Sz-S, 小林, 1986, 奥野, 1996, 町田・新井, 2003) や、約8,000年前に桜島火山から噴出した桜島11テフラ (Sz-11, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 2003, 奥野ほか, 2000) については、調査地点が尾根部にあるために土壌の保存状態が良くなく、浸食を受けて失われていると推定されよう。

一方、南北セクション (SP01) の試料1が採取されたスコリア層については、層位や岩相などから、1235 (嘉禎元) 年に霧島火山から噴出したと推定されている霧島御鉢高原スコリア (Kr-Th, 井ノ上, 1988, Okuno et al, 1998, 町田・新井, 2003) の可能性が高い。

6. まとめ

高八重遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、下位より霧島アワオコシテフラ (Kr-Aw, 約4.5～5万年前)、始良深港テフラ (A-Fm, 約3.1万年前)、始良大隅軽石 (A-Os, 約2.6～2.9万年前)、霧島牛のすねテフラ下部 (Kr-USL, 約7,300～7,600年前)、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約7,300年前)、霧島御池テフラ (Kr-M, 約4,600年前)、霧島御鉢高原スコリア (Kr-Th, AD1235年) などを検出することができた。本遺跡で検出された縄文時代の遺構や遺物包含層の下位に認められた起源が不明な成層したテフラ層については、A-Osと考えられる。

文献

- 荒牧重雄 (1969) 鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物。地質雑, 75, p.425-442。
速藤 尚・杉田 剛・法元 悠一・児玉 三郎 (1962) 日向海岸を構成する段丘について。宮崎大学芸紀要, 14, p.9-28。
池田 晃子・奥野 充・中村 俊夫・小林 哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器 14C 年代。第四紀研究, 34, p.377-379。

- 井ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史. 岩鉱, 83, p.26-41.
- 小林哲夫 (1986) 桜島火山の形成史と火砕流. 文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(研究代表者 荒牧重雄), p.137-163.
- Kobayashi, T., Hayakawa, Y. and Aramaki, S. (1983) Thickness and grain-size distribution of the Osumi pumice fall deposit from the Aira caldera. 火山, 28, p.129-139.
- 町田 洋 (1977) テフロクロノロジー. 日本第四紀学会編「日本の第四紀研究—その発展と現状」, 東京大学出版会, p.59-68, 373-391.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰(AT)の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代. 地質雑, 99, p.787-798.
- Nagaoka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, south- ern Kyushu, Japan. Geogr. Rept Tokyo Metropol. Univ., 23, p.49-122
- 奥野 充 (1996) 南九州の第四紀末テフラの加速器14C年代(予報). 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.89-116.
- 奥野 充・福島大輔・小林哲夫 (2000) 南九州のテフロクロノロジー—最近10万年間のテフラ—. 人類史研究—, 12, p.9-23.
- 奥野 充 (2002) 南九州に分布する最近3万年間のテフラの年代学的研究. 第四紀研究, 41, p.311-316.
- Okuno, M., Nakamura, T. and Kobayashi, T. (1998) AMS 14C dating of historic eruptions of the Kirishima, Sakurajima and Kaimondake volcanoes, southern Kyushu, Japan, Radiocarbon, 40, p.825-832.
- 早田 勉 (1997) 風土と自然環境. 宮崎県編「宮崎県史通史編」, 1, p.3-77.
- 早田 勉 (2006) 都城盆地とその周辺に分布するテフラ(火山灰). 都城市編さん委員会編「都城市史資料編」考古, p.609-629.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
南北セクション (SP01)	1	+++	灰褐	6.8	++	sc	灰褐, 褐, 暗灰
	2	-	-	-	++	pm>bw	白, 透明, 淡褐
	4	-	-	-	+	pm	透明
	6	-	-	-	+	pm	透明
	8	-	-	-	++	pm	白, 透明
	10	+	白	2.1	++	pm	白, 透明
	12	-	-	-	+	pm	透明, 白
	14	-	-	-	+	pm	透明, 白
調査区北壁	1	-	-	-	+++	pm	白
	2	-	-	-	+++	pm	白

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, + : 少ない, 最大径の単位は, mm. bw : バブル型, pm : 軽石型.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	測定対象	粒子数	火山ガラス (n)
調査区北壁	2	軽石型ガラス	40	1.498-1.499

屈折率の測定は, 温度変化型屈折率測定法 (RIMS2000) による.

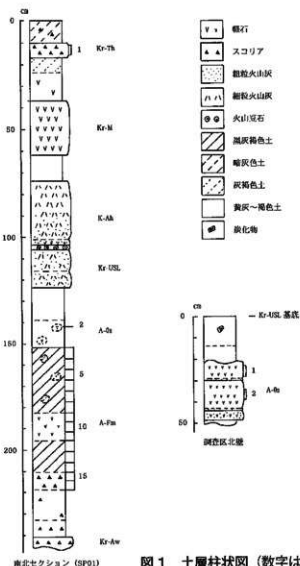


図1 土層柱状図 (数字はテフラ分析の試料番号)

V まとめ

これまで述べてきたように、本遺跡では縄文早期の遺構・遺物を検出、確認することができた。ここで遺跡の様相を総括したい。

本遺跡で確認した遺構は土坑3基、集石遺構6基である。ただしSC03は埋土中に含まれた礫の状況から、本来は集石遺構であった可能性がある。また、SC02については、比較的床面積の大きい土坑といえるが、床面が焼けていたことから、おそらくは複数の集石遺構が重複した姿であると考えられる。ただし、同遺構内に重複して存在する深い円形の土坑について、その用途は不明である。集石遺構については、全て深さ40～60cm程度の土坑を伴うものであった。SS01は既にその半分が破壊されていたこともあって細長い形状に見えるが、底面が2ヶ所確認でき、これもおそらくは2基以上の集石遺構が重なっているものと捉えたい。SS02では、中心部分に大きな礫を配していた。その下から明確な配石は確認できなかったもの、おそらくはこの大礫が配石的な意味をもつのではないかと思われる。ちなみに隣接するSS03では、床面付近に石が配されているような状況が看取された。

本遺跡周辺における早期遺跡の確認例は少ない。本遺跡から南東に位置する田尾地区内の木ノ下遺跡では集石遺構が多数確認されるなど、大淀川支流有水川に近接する微高地上に立地する早期遺跡である。また北方にあたる四家地区には、雀ヶ野遺跡群がある。ここの第3遺跡第1次調査区では、本遺跡と近似した遺物の年代を示す。有水地区の試掘調査においても早期に相当する炉穴遺構が確認されている。

次に出土遺物については、押型土器、下割釜式土器、桑ノ丸式土器、妙見式土器、平椀式土器、塞ノ神式土器など、早期中葉から後葉を中心とする比較的時期幅のある出土傾向となった。というのも、本遺跡が丘陵の頂部に位置するため、傾斜角度が大きく、故にP11火山灰、陸摩火山灰が存在しないという地層堆積の状況により、包含層である褐色土層の相対年代が始良大隅火山灰直後からウシノスネ火山灰直前という大きな幅でしか捉えられないことに因る。とはいえ、出土土器の様相から縄文早期中葉末から後半期に相当する時期に生活が営まれていたことは立証できよう。

その土器の中でも注目すべきは、本遺跡出土遺物の主たる妙見式土器であろう。「天道ヶ尾式」とも仮称され、また「平椀式前段階」ともいわれてきた妙見式の器形の特徴には①なだらかな外反口縁、②口縁端部付近に貼付突帯を多条に施文、③胴部中央付近で屈曲し、稜線をもつ、④頸部がわずかにくびれ、胴部が張るなどが挙げられる。また文様要素は縄文や刺突文、貼付突帯など多様な構成をもつ。この土器は当遺跡の中で最も多く確認でき、特に、胴部に明確な屈曲のない、口縁端部や胴部に縦位、横位などの多条の貼付突帯をもち、全体的には斜位の縄文が施されたものが多かった。それらは吉本編年に照らせばⅡ～Ⅲ期に相当すると思われる。妙見式はいまだその分布域が明確でない資料とされ、また押型土器から平椀式土器への型式における時間的移行に関する議論のなかで、今後検討されるべき土器型式といえる。本遺跡出土資料がその把握の一助となれば幸いである。

主な参考文献

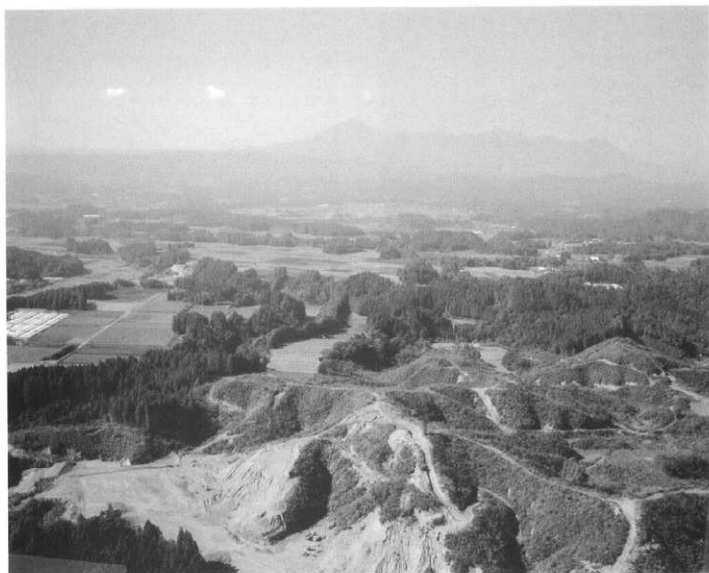
- 新東晃一1982「塞ノ神式土器」(加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器1)
吉本正典1994「宮崎県えびの市妙見遺跡において認識された縄文時代早期の一土器型式について」(『月刊考古学ジャーナル』378)
桑畑光博1995「南九州縄文早期土器様式の変化について」(『南九州縄文通信』9)
鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会1995「旧石器から縄文へ」鹿児島県考古学会合同研究大会資料集
雨宮瑞生・上田耕1997「塞ノ神式・平椀式土器編年の現状」(『南九州縄文通信』11)
九州縄文研究会1998「九州縄文土器編年の諸問題-早期後半型土器編年の現状と課題-九州縄文研究会鹿児島大会資料集
横手浩二郎1998「手向山式土器の断片と編年試案」(『九州の押型土器-論叢編-)
新東晃一2004「南九州のコブ(楕)付き土器の系譜-南九州縄文時代早期後半期の土器型式の義拓をめぐり-手法」(『南九州縄文通信』15)

高城町教育委員会2004「雀ヶ野第3遺跡(第3次調査)高城町文化財調査報告書第16集

高城町教育委員会2005「雀ヶ野遺跡群」高城町文化財調査報告書第18集

山下大輔2005「下割釜式および桑ノ丸式土器の再検討」(『南九州縄文通信』16)

小林達雄編2008「総覧 縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会

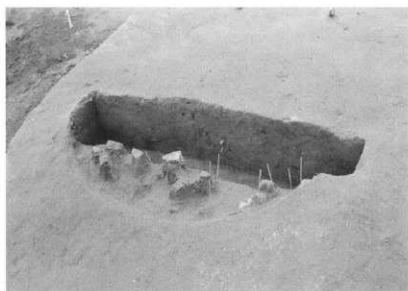


遺跡遠景（南東方向より）



遺跡全景

図版 3



SCO1 半裁状況 (南から)



SSO2 検出状況 (北から)



SCO2 掘り下げ状況 (南から)



SSO3 検出状況 (北から)



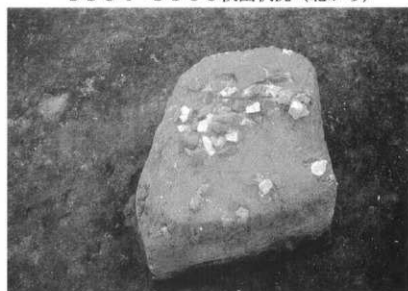
SCO3 掘り下げ状況 (東から)



SSO4・SSO5 検出状況 (北から)

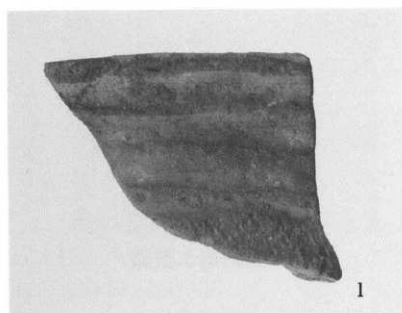


SSO1 断面 (西から)

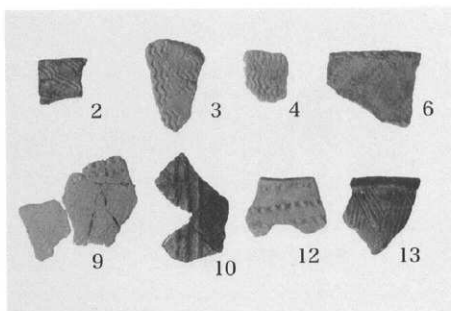


SSO6 検出状況 (南から)

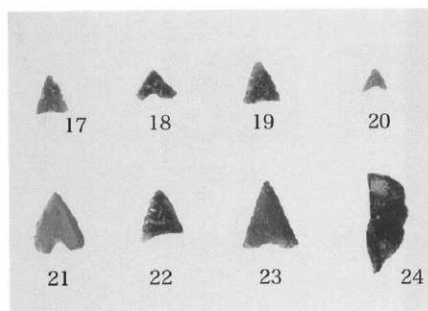
图版 4



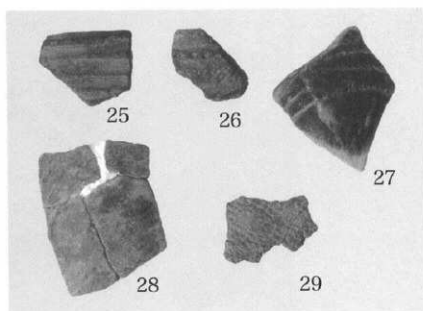
SC01内出土遺物



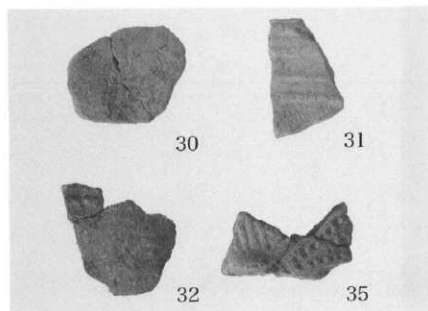
SC02内出土遺物



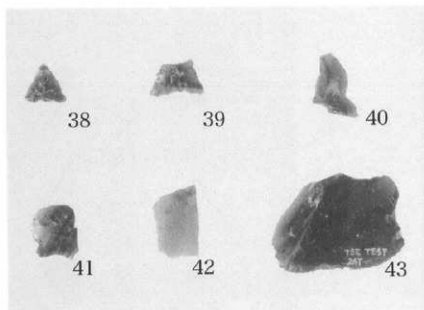
SC02内出土遺物



SC03内出土遺物

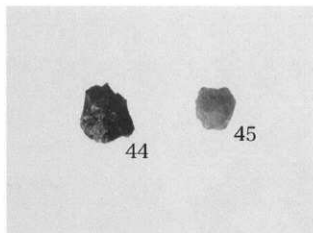


SS01内出土遺物

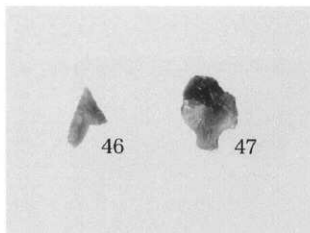


SS01内出土遺物

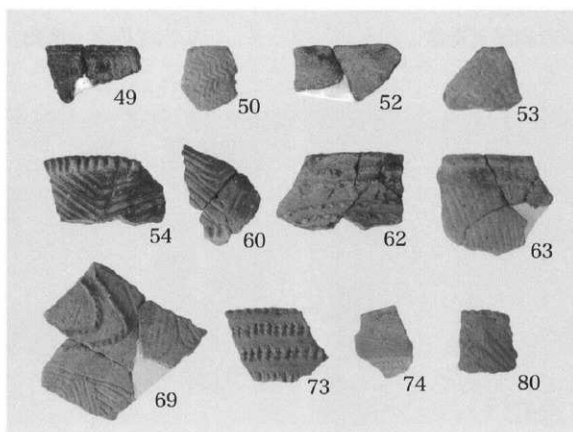
図版 5



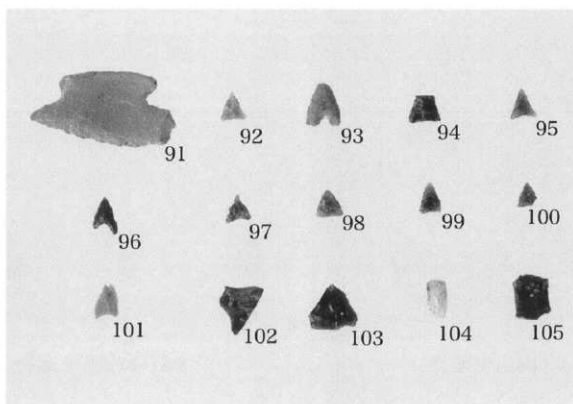
SS02内出土遺物



SS03内出土遺物



包含層内出土遺物



包含層内出土遺物

フリガナ	タカバエイセキ					
書名	高八重遺跡					
副書名	牛肥育舎建設地造成に先立つ遺跡発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第90集					
編著者名	米澤 英昭					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市郷城町6街区21号					
発行年月日	平成21年(2009)3月					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高八重遺跡	都城市 高城町有水	31°60' 付近	131°10' 付近	2007. 4.9~ 2007. 6. 29	約700㎡	民間牛肥育舎 建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落?	縄文時代早期	集石遺構 土坑	縄文土器 石器			

都城市文化財調査報告書 第90集

高八重遺跡

発行年月 平成21年(2009)3月

発行 都城市教育委員会

〒885-8555

宮崎県都城市姫城町6街区21号

TEL 0986-23-2111

印刷 祝吉印刷所

〒885-0018

宮崎県都城市郡元2丁目11-21

TEL 0986-23-3007